

文化人類学教授法プロジェクト報告書

1. はじめに

昨1992年の5月上旬、放送教育開発センターの加藤秀俊所長から、私（米山）へ電話があり、そしてつぎのような手紙が来た。

前略

先日は電話で失礼しました。そのときにおねがいた件ですが、本年度の放送教育開発センターの計画のなかに、あらたに「大学教授法」の試行的研究が追加されることになりました。本格的には来年度からですが、その目的は、いくつかの基本科目についてモデル的なカリキュラムを作成して全国大学での教授法の参考にしていただくことにあります。

本年度は米山さんに「文化人類学入門」、樺山（紘一）さんに「史学概論」の主査になっていただき、一年三〇週間ぶんをどのように教えるか、ご研究いただきたいのです。そこでは、まず、つぎのようなことが問題になるとおもいます。

- 一、入門編の文化人類学で、この三〇週をどのように段階的に設計するのが学生にとって理解しやすいか。
- 二、各週ごとに、どのようなリーディング・アサインメントを学生にあたえるのが適切か。
- 三、どのような視聴覚素材をどの場面で利用するか。
- 四、学生と教授との間で質疑応答、討論を活発にするために、どのような技法があるか。
- 五、学問の性質上、実習、調査などが必要な場合、それをどのように計画し、またそれを講義とどのように連結させることがのぞましいか。

要するに、これは若い講師、助教授などがはじめて教壇に立った時の手引きになるような教授用の「虎の巻」のようなもの、とかんがえていただいて結構です。あるいは、アメリカの大学での、シラバスのようなものといってよいかもしれません。

これを作成していただくにあたって、京都で数人の共同研究班を組織していただき、来年一月までに完成していただけないでしょうか。人選は米山さんにすべてご一任申し上げます。謝金の支出は困難かとおもいますが、研究費として使用できる予算があります。また、この共同研究に参加される米山班のメンバーを客員、または研究協力者としてセンターのなかでおねがいすることも望ましいとかんがえています。

（後略）

一九九二・五・八

電話でいちおう承諾すると言ってしまったので、やってみるほかはない。

「文化人類学入門」のカリキュラムをどのように作るか。いろいろ考えてみたが衆知を集めるほかないだろう。そこで、私たちはおおまかにつぎのような計画を立てた。

- ① 京都を中心として、文化人類学を講義している人達に集まってもらい、研究会を開く。
その討論をもとにして講義案を作る。
- ② 学生アルバイトの助力を得て、入手可能なテキスト、概説書、関係の書物から講義案に参考になる項目を整理する。
- ③ アンケート方式で、本年度の講義の計画、あるいはそれに替わるものを知り合いの文化人類学者の諸氏から収集する。
- ④ それらを資料にして、一応の講義案を作成する。その作成には米山と福井勝義があたる。
- ⑤ その原案を材料にして、もう一度研究会を開く。
- ⑥ 最終的な報告書を作成する。

この報告書は、そのような経過を経て取りまとめられた。執筆は米山が当たり、研究会記録の編集を福井が担当した。

2. 文化人類学の講義と私たちの関わり

米山は、一九六一年から甲南大学文学部で非常勤講師として文化人類学の講義を担当しはじめ、六五年に正式の文化人類学担当の助教授に採用されてからずっと、文化人類学の教師の役割を演じてきた。『文化人類学の考え方』（講談社現代新書）を書いたのが六八年である。そのとき、この本の冒頭に、つぎのように書いた。

「××学入門、という性質の書物は、日本人にはとりわけ好きな表題だといわれているけれども、むろんそう簡単に書けるはずはない。十分に円熟した学問体系をもった、長老クラスの大家が、その蓄積を生かしてやさしくまとめられるのが、ほんとうの良い入門書だと私は思っている。」

この本を書いた当時、米山は三八歳、いらい四半世紀が経過したが、自分ではまだ「円熟した学問体系をもった」という境地に達したとは考えてはいない。しかし、いたずらに馬齢を重ねてきたことは事実であるし、それなりの文化人類学への思い入れは育っているように思う。

幸か不幸か、私はもう定年まであと二年だというので、ことしは簡単だが学生に渡す講義計画—前期はもっぱら文化人類学の一般的情報を紹介し、後期は個別の学者とその学説について私なりのレビューをするという趣向のものが—を作って、学生たちに渡してあった。例年同じように年度初めに計画を立てて、それに従って講義を試みるのであるが、満足のいくこともあれば、自分でも不満足な講義に終わることもある。

米山は講義の開始にあたって、テキストを指定することはしない。一般に学生は経済的には貧しいという思いこみがあって、事実私の研究室に出入りしている学生は例外を除いてみんな自活して学生生活を送っているようだ。見かけほど学生はぜいたくではない。それで、教科書

を指定してそれを買わせるということはしてこなかったのである。

しかし参考書としては、さまざまな書物を紹介した。米山自身も古くは蒲生正男、祖父江孝男編『文化人類学』（有斐閣：一九六九年）の一章「文化の動態」を分担執筆したり、京都大学人類学研究会編『目でみる人類学』（ナカニシヤ出版：一九七三年）に参画したり、それに自分で『文化人類学の考え方』（講談社：一九六八年）を書いたりしている。この本はロングセラーをなお続けている。また、この一〇年来、私自身も参加して教科書ないし参考書を編集している。例えば大林太良、綾部恒雄と三人で編集した『文化人類学入門リーディングス』（アカデミア出版会：一九八二年）、伊藤幹治との共編『文化人類学へのアプローチ』（ミネルヴァ書房：一九八八年）、谷泰との共編『文化人類学を学ぶ人のために』（世界思想社：一九九一年）の三冊である。これらの本のことを年度初めに学生に示しておく。どれだけ注意深くそれを利用しようという学生がいるかはわからないが、最近では生活水準が上がってきて、学生たちも本気で勉強する気持ちがあれば、数千円の教科書代を使わない者は少なくなっている。様子が変わったので教科書指定をしてもよいかとも思う。もっとも私たちの世代も、ひもじい思いをしてでも本は買った記憶がある。一時期米山は、概論的に、文化の定義に始まり、社会構造、親族組織、生活様式、生業形態、経済活動、政治体制、宗教と儀礼といった項目に沿って話をして行くことが苦痛になり、むしろ優れた民族誌を介して、文化人類学に興味を持ってもらうことを考えた。採集民として南米の南端フエゴ諸島のヤーガンを紹介することからはじめて、ムブティ（ピグミー）、サン（ブッシュマン）、イヌイト（エスキモー）、オーストラリア原住民などの狩猟採集民、ヌエル、マサイなどの牧畜民、そしてアフリカのバンツー系農耕民の例などをつぎつぎに紹介しながら、そのなかに人類学の理論、学説、いくつかの学派を紹介するという方法をとってきたこともあった。最近になって、一種の折衷的な形で、文化・社会の諸項目と諸学説を、私の独自のパラダイムを用いて、それに沿って話して行くという方法をとってきたのである。

長い間、一般教育課程における文化人類学の講義を担当してきたが、先達があったわけではなく、ある意味で自己流にやって来た。しかし、はじめ甲南大学での講義の時には、フェリックス・M・キーシングの“Cultural Anthropology : The Science of Custom”(1958)をタネ本にして講義案を練った。culture と a culture すなわち文化一般と個別文化の区別の言い回しなど、このテキストから学んだものであった。当時、クローバー、ビールスとホイジャー、ハースコヴィッツのテキスト、リントン、クラックホーン、ファース、あるいはベネディクト、M・ミードなどのペーパーバックが、アメリカの大学町の書店では容易に入手できた。米山はもっぱらそのような書物に頼って講義を進めてきたのであった。

やがて、文化人類学も次第にわが国学界での市民権を獲得するようになり、後に資料としてつけているが、多くの教科書が書かれ、講義に用いられている。フィリップ・K・ボックの『現代文化人類学入門』（江渕一公訳：講談社：一九七四年）が学術文庫版として登場したり、リーンハート、ビーティ、エヴァンズ＝プリチャードらの英国系の社会人類学や、フランス系の構造主義なども広く紹介されるようになった。各地の大学の教育の充実に加えて、国立民族学博物館の設立と積極的な研究活動、学界の活発化などによって、文化人類学も次第にアカデミックな形を整えるようになってきたのである。

じつは、かつてアメリカ人類学会 American Anthropological Association が、Teaching of Anthropology という特集を組み、文献集を別冊としてつけるという仕事を一九六〇年代初頭におこなっている。わが国においても、現在かなりの大学において文化人類学が講義され、専攻学生の数も増えているのだから、日本民族学会が中心になって、ある程度の標準的なカリキュラムを準備しておくことが必要ではないかと思う。

3. カリキュラムの構想

計画に従って、はじめの研究会は、一九九二年七月二〇日、京大会館の一室において行われた。参加者はつぎの諸氏であった。

掛谷 誠（京都大学アフリカ地域研究センター教授。もと筑波大学助教授から弘前大学教授。アフリカ農耕民の研究者。）

市川光雄（京都大学アフリカ地域研究センター助教授。大学院で生態人類学担当。アフリカ狩猟採集民ピグミーの研究者。）

谷 泰（京都大学人文科学研究所教授。ヨーロッパ、中東の牧畜民社会の研究者。）

田中二郎（京都大学アフリカ地域研究センター長。アフリカ狩猟採集民サンの研究者。）

田中雅一（京都大学人文科学研究所助教授。スリランカ社会の研究者。）

菅原和孝（京都大学総合人間学部助教授。アフリカ狩猟採集民サンの研究者。）

片山一道（京都大学理学部助教授。オセアニアの自然人類学、先史考古学の研究者。）

福井勝義（国立民族学博物館助教授。東アフリカ牧畜民ボディ、認識人類学の研究者。）

松田素二（大阪市立大学助教授。アフリカ・ナイロビの出稼ぎ民の研究者。）

須藤 護（放送教育開発センター助教授。民俗学者。）

米山俊直（京都大学総合人間学部教授。アフリカと日本の地域人類学の研究者。）

そのほかに研究協力課長西岡正徳氏、研究協力第一係尾藤広幸氏も陪席傍聴された。

その討論はテープに収録して、参加者にも送り加筆をお願いした。またプロジェクト助手として京都大学農学部聴講生の高村竜平君、文学部学生佐藤知久君、そして当時の教養部社会学研究室（現総合人間学部）の松村佳子さんの助けを借りた。

討論の内容は付録資料の（１）としてつけてあるが、印象的であったのは、講義をする担当者がきわめて自由に自分の枠組みを作って、熱心にその一人一人の関心の所在を示しながら、同時に文化人類学の全体的イメージに心を配っていることであった。いわば文化人類学の総合的科学としての特色が、ここに非常に良く示されているような印象をつよく受けた。

そして、多くの方をお願いした、それぞれの現行の、あるいは理想とするカリキュラムの例は、非常に多くのことを示唆しているように思われる。私たちが作ったカリキュラム案は、これらの多くの案に比べて、特に優れているとは思わない。そこで、以下寄せられたカリキュラム（現行案あるいは理想案）を順番に検討して、最後に私たちの案を提示することにしたい。

4. カリキュラム（現行案あるいは理想案）の実例

お願いに応じてくださったのは、秋道智弥（国立民族学博物館）、阿久津昌三（信州大学）、江口信清（立命館大学）、奥野卓司（甲南大学）、小馬徹（神奈川大学）、澤田昌人（山口大学）、菅原和孝（京都大学総合人間学部）、杉村和彦（福井県立大学）、高山龍三（大阪工業大学）、滝口直子（大谷大学）、田中雅一（京都大学人文科学研究所）、村瀬智（大谷女子短期大学）の各氏であった。あつく御礼申し上げたい。この他にも、梶原景昭（大阪大学人間科学部）氏は、調査先のバギオ市から丁寧な連絡をいただいた。そして最後に、米山自身の先述の本年度の講義案をつけておくことにした。小馬氏は、カリキュラム案ではなく、参考のために送っていただいた江口氏の案に対するコメントを書いてこられた。五十音順に紹介するので、異色なものになったが、貴重な意見だった。それぞれの書き方を尊重して、原形に近いままで掲載させていただいた。ただし少し修正した部分もあることをお断りしておく。

例① 秋道智弥案

テーマ	参考文献・資料／視聴覚素材
第1週 いまなぜ文化か	
第2週 環境論－1 生業環境と歴史	手持ち資料
第3週 環境論－2 資源利用と管理	『狩りと漁撈』、資源への文化適応（雄山閣出版） ／NHK（人間はなにを食べてきたか）
第4週 環境論－3 風景と図像学	『環境イメージ論』（弘文堂）、大文字山、中世の図像学／
第5週 認識論－1 言語と分類	『言語人類学』（至文堂）、『認識と文化』（東大出版会）
第6週 認識論－2 自然と文化	『人類学とは何か』（NHK）、江戸の動物記／NHK航海術
第7週 儀礼論－1 解釈と機能	『フェスタ』（平凡社）、『儀礼の過程』（思索社）／祭り、雨乞い儀礼
第8週 儀礼論－2 図像と行為	『文化人類学へのアプローチ』（ミネルヴァ書房）、『仮面の森』（講談社）
第9週 象徴論－1 分類と世界観	『文化と両義性』（岩波書店）
第10週 象徴論－2 行為と観念	『口頭伝承論』（河出書房新社）、音の文化、色の文化
第11週 身体論－1 性と発育	『子ども文化の原像』（日本放送出版協会）、『年齢の本』（平凡社）／育児としつけ
第12週 身体論－2 病気と宇宙論	『病気と治療の文化人類学』（海鳴社）

第13週	身体論－3 しぐさと慣習的行動	『しぐさの世界』（日本放送出版協会）、マン・ウォー チング／D. モリスの映画
第14週	交換論－1 親族とアイデンティティ	『民族文化の世界』（下）（小学館）
第15週	交換論－2 集団間の交換	『市の人類学』（平凡社）／クラ交易
第16週	権力論－1 世俗と聖性	『王権の位相』（弘文堂）
第17週	権力論－2 国家法と慣習法	秋道智弥論文
第18週	移動論－1 遊動と移動	牧畜民、採集民の移動
第19週	移動論－2 歴史と境界	『海人の世界』（同文館） スライド、難民問題
第20週	開発論－1 山野開発と周縁世界	『ナマコの眼』（筑摩書店）、『エビと日本人』（岩波書 店）、中世の開発
第21週	開発論－2 都市と結界	『結界の構造』、『祇園祭』（中央公論社）
第22週	変容論－1 文化の変化と変容	『歴史のなかの社会』（弘文堂）
第23週	変容論－2 同化と創造	『日本人の国際性』（くもん書版）
第24週	変容論－3 民族の抗争	『民族とは何か』（岩波書店）
第25週	日本論－1 日本文化の系譜	『日本民族文化の源流』（山川出版社）、日本の誕生 （集英社）
第26週	日本論－2 日本文化の特質と地域性	日本論の視座、『日本の社会史』（岩波講座）
第27週	地域研究法	
第28週	野外調査法	『フィールドワークを学ぶ人のために』（世界思想社）
第29週	論文作成・研究法	
第30週	まとめ	

例② 阿久津昌三氏案

	テーマ	参考文献・資料／視聴覚素材
第1週	文化人類学の世界	クラックホーン『文化人類学の世界』（講談社）
第2週	異文化の解説①	マリノフスキー／ラドクリフ＝ブラウンの民族誌から
第3週	異文化の解説②	谷泰『文化を読む』（人文書院）

第4週	自然と文化	狩猟採集民、牧畜民、農耕民の世界から
第5週	自然と社会	※生業形態に関する映像
第6週	家と家族	清水昭俊『家・身体・社会』（弘文堂） 村武精一『家と女性の民族誌』（弘文堂）
第7週	親族と結婚	レヴィ＝ストロース『親族の基本構造』（番町書房） 和田正平『性と結婚の民族誌』（同朋舎）
第8週	呪術、宗教、科学	タンバイア『呪術、科学、宗教』（ケンブリッジ大学出版会）
第9週	政治と宗教のあいだ	大森元吉『法と政治の人類学』（朝倉書店） 吉田禎吾『宗教人類学』（東京大学出版会）
第10週	交換のはたらき	秋道智弥『海人の民族学』（日本放送出版協会） ※〈クラ〉交換の映像
第11週	むら、まち、くに	東外大AA研編『アフリカ社会の形成と展開』（同朋舎）
第12週	定住と漂泊	和崎洋一『スワヒリの世界にて』（日本放送出版協会）
第13週	男と女	アードナー／オートナー『男が文化で女は自然か?』（晶文社）
第14週	生と死	ブロック／バリー編『死と生の再生』 (ケンブリッジ大学出版会)
第15週	時間と空間	エヴァンズ＝プリチャード『ヌアー族』（岩波書店） ※〈ヌエル〉の映像
第16週	人間と動物	ウィリス『人間と動物』（紀伊国屋書店）など
第17週	狂気と病い	波平恵美子『病気と治療の文化人類学』（海鳴社）
第18週	民族と音楽	※藤井知昭監修の民族音楽と映像
第19週	音と図像の コミュニケーション	川田順造『西の風・東の風』（河出書房新社）
第20週	身体、しぐさ、 ジェスチャ	野村雅一『しぐさの世界』（日本放送出版協会）
第21週	ことばと遊び	江口一久『ことば遊びの民族誌』（大修館）
第22週	演劇と見せ物	ターナー『象徴と社会』（紀伊国屋書店）など
第23週	芸術と人間	レイトン『芸術人類学』（ケンブリッジ大学出版会）
第24週	映像と人類学	ベイトソン、アイベスフェルト、ミードなど
第25週	民話、物語、神話	文献多数
第26週	語りの世界	川田順造『口頭伝承論』（河出書房新社）
第27週	未開と文明	グディ『未開と文明』（岩波書店）
第28週	文字社会と無文字社会	藤枝晃『文字の文化史』（岩波書店） 川田順造『無文字社会の歴史』（岩波書店）
第29週	エスニシティと 国民国家	川田順造・福井勝義『民族とは何か』（岩波書店）
第30週	現代世界と人類学	総合討論

例③ 江口信清氏案

週	テーマ	参考文献+視聴覚教材（＊印）
1	ヒトと文化	クラックホーン 1971 『文化人類学の世界』 講談社。
2	文化人類学と文化批判	マーカス+フィッシャー 1989 『文化批判としての人類学』 紀伊国屋書店。
3	民族と世界	川田・福井編 1988 『民族とは何か』 岩波書店。
4	文化の再構築	シュリーマン『古代への情熱』 岩波書店。
5	文化人類学調査法と民族誌	河口慧海『チベット旅行記』 講談社学術文庫。
6	生物学的進化と社会文化的進化	サーヴィス+サーリンズ 1976 『進化と文化』新泉社
7	自然環境と文化	佐々木高明 1882『日本農耕文化の原像をもとめて』 日本放送出版協会
8	自然環境と文化	＊〈四つの生態系と文化〉フィルム鑑賞。
9	社会構造の多様性： 婚姻と家族	和田正平 1988 『性と結婚の民族学』同朋舎
10	社会構造の多様性： 出自と集団編成	モルガン 1958-9 『古代社会』岩波文庫。
11	社会統合と政治	サーヴィス 1962『未開の社会組織』 弘文堂。
12	狩猟採集民社会と文化	市川光雄 1982 『森の狩猟民』 人文書院。
13	狩猟採集民社会と文化	＊〈クン・ブッシュマン〉フィルム鑑賞。
14	牧畜民社会と文化	福井・谷編 1987『牧畜文化の原像』日本放送出版協会。
15	牧畜民社会と文化	＊〈ヌエル族〉フィルム鑑賞。
16	農民社会と文化	きだみのる 1967 『にっぽん部落』 岩波新書。
17	農民社会と文化	＊〈椿山〉フィルム鑑賞。
18	多民族共生の都市社会と文化	江口信清「トロントのカリバーナ」「季刊民族学」No. 44 .
19	都市と民族	綾部編 1985 『民族とエスニシティ』 アカデミア出版会。
20	言語と文化	鈴木孝男 1975 『ことばと社会』 中央公論社。
21	芸術と文化	藤井知昭他編 1992 『民族音楽概論』 東京書籍。
22	宗教と文化	フレーザー『金枝篇』 岩波文庫。
23	新宗教と日本社会	
24	宗教と文化	＊〈ダニ族〉フィルム鑑賞。
25	アイヌ民族と日本社会	榎森進 1987 『アイヌの歴史』三省堂。
26	アイヌ民族と日本社会	＊〈NHK 幻のイオマンテ〉フィルム鑑賞。
27	在日朝鮮・韓国人と日本社会	金賛汀 1985『異邦人は君が代丸に乗って』岩波書店
28	在日朝鮮・韓国人と日本社会	＊〈NHK 四天王寺ワッソ〉フィルム鑑賞。
29	日本社会と他民族共生への道。	
30	人類学と21世紀の世界	

ほぼ8年間にわたって一般教育「文化人類学」を講じてきました。毎年すこしづつ内容やスタイルを変えながらどうすれば効果的に教えられるか試行錯誤の連続だったといえるでしょう。私は1年間、約24回を概論的に広く、薄く紹介し、文化人類学の全体像の理解を進めるべく努力してきました。入門レベルの文化人類学を教えるに当たって、次の点をつねにこころがけてきました。

- (1) 難しいことを時間をかけて教えても、けっきょく学生は理解できていないことが多かったようです。身近な事例をまじえて分かりやすい言葉で、同じ点を繰り返す。
- (2) 視聴覚教材を使うと、とても頭に残るようです。
- (3) 参考文献を講義毎、あるいは講義の話題を変えるごとに紹介する。
- (4) 「日本社会・文化では」というふうに、比較しながら説明するとひじょうに関心を示すようです。
- (5) 半年毎のシラバスを学期はじめに配布し、話の流れを前もって説明する。

(江口信清氏の補記)

例④ 奥野卓司氏案

(1) 文化人類学の考え方 第1週～第8週

週

参考文献・資料／視聴覚素材

- 1 文化人類学の考え方（文化とは？）：米山『文化人類学の考え方』講談社。
／「To Fly」スミソニアン 航空博物館。
- 2 人種・民族・エスニック・グループ：野村『民族で読むアメリカ』講談社。
／アメリカインディアンのVCR（BBC制作）
- 3 現代文化と文化人類学：米山『同時代の人類学』日本放送出版協会。
／「アメリカでいま何が起きているか」NHK。
- 4 現代のなかの「未開の思考」：レヴィ＝ストロース『野生の思考』みすず書房。
／「ホピの教え」PBS制作。
- 5 今日のトーテミズム：レヴィ＝ストロース『今日のトーテミズム』みすず書房。
／レヴィ＝ストロースの講演DCR
- 6 テクノ・アニミズム：奥野『パソコン少年のコスモロジー—情報の文化人類学』筑摩書房。
／自作VCR「パソコン少年」
- 7 文化とコスモロジー：山口昌男『文化と両義性』岩波書店、
／「バリ島の舞踊」インドネシア制作。
- 8 サルからヒトへ：河合雅雄『森林がサルを生んだ』小学館。
／「人類の起源1」BBC制作。

(2) 諸民族の生活様式の起源と変容 第9週～第16週。

- 9 衣の起源：深作光貞『衣の文化人類学』PHP
／「人類の起源2」BBC制作。
- 10 衣の展開（紐衣、繊維、タパ）：福本『太平洋の布』
／「下着の3000年」（既存VCR）

- 11 食の起源（雑食性）：ライアル・ワトソン 『悪食のサル』
／「人類の起源2」BBC制作。
- 12 食の展開と伝播：レヴィ＝ストロース 『料理の三角形』
／NHK「医食同源」
- 13 衣食の近未来：ルドルフスキー・奥野訳『さあ横になって食べよう』
／CNN「バイオスフィア」
- 14 家族・家庭・イエ：井上忠司『装置としての家庭』
／「人類の起源3」BBC制作
- 15 住居の展開：小山修三『縄文時代』
／NHK「タイの高床住居」
- 16 家庭の近未来：上野・奥野他『現代世相探検学』
／「スペースセトルメント計画」NASA
- (3) 分化した文化人類学の紹介 第17週～第26週
 - 17 しぐさの文化人類学：モリス『マンウオッチング』 小学館
／「行動学の可能性」マックスプランク研究所制作
 - 18 ジェスチュア：モリス・奥野訳『ジェスチュア』
／「モリス講演・日高訳」(VCR)
 - 19 ノンバーバル・コミュニケーション：ホール『沈黙の言葉』
 - 20 遊びの文化人類学：カイヨワ『遊びと人間』
／「あやとりの伝播」(ハワイ大学)
 - 21 「大人」と「若者」：ヴァン・ジェネップ『通過儀礼』弘文堂
／「通過儀礼」(UCバークレー)
 - 22 心身文化論：イリイチ『脱病院化社会』
／NHK「アーマルベーター」
 - 23 医療人類学：中川米造『医療人類学』
／NHK「漢方3000年」
 - 24 移動・遊動・自動車文化：P.Berger『故郷喪失者たち』、Plath 論文
／NHK「自動車」 フォード博物館「ロードサイド・エンパイアーズ」
 - 25 情報社会の文化人類学：奥野『コンピュータ民族学』
／PBS「ハッカー」
 - 26 情報による人間関係：奥野『パソコン少年の コスモロジー』
／ペンシルバニア州立大「アーミッシュ」
- (4) 文化人類学の未来 第27週～第30週
 - 27 諸科学のパラダイム転換と人類学 カルロス・カスタネダ『ドンファン』の教え』
／シカゴ大「日本のニューアカデミズム」
 - 28 文化人類学の新展開：『文化人類学15の理論』(中公新書)
／イリノイ大「映像人類学」

29 文化と文明：梅棹忠夫『比較文明論』

／V P L「人工現実感の世界」

30 人類の近未来：立花隆『宇宙からの帰還』

／映画「2001年宇宙の旅」「グレート・ランナー」など。

視聴覚素材は必ず複数をビデオ編集して、毎回使っています。

甲南大学では、現在学部の社会学Aコース（社会学・人類学コース）の学生を対象にして、1年人類学（教養課程）（森田）、2年文化人類学（以後は専門課程）（奥野）、3年、4年現代文化論（奥野）、文化人類学特論 I－II（森田）を開講しています。他に基礎演習、社会学・人類学実習、演習 I－II、特殊研究があります。ここでは、2年の「文化人類学」とおなじレベルを想定しましたが、ぼくとしては、それがいわゆる「人類学史」にならないように努めているつもりです。つまり、毎回、今日の我々の文化から出発し、種々の人類学的なレポートを映像で紹介しながら、我々の文化の検証にもどるという方法をとっています。（他の工芸繊維大、同志社女子大も同じ方法です。）

奥野卓司氏の補記。

例⑤ 小馬徹氏の回答

小馬氏からは次のような回答が1992年9月19日寄せられた。依頼状には江口案を参考のために同封してあったので、それに関わるコメントである。

拝復

例年にない暑く長かった残暑も去り、気が付けばもう秋の気配の色濃い昨今、先生には益々御健勝で、御活躍のことと拝察申し上げます。

さて、先日は、文部省放送教育開発センターによる「文化人類学概論」のモデルカリキュラム作成に関わるご相談を賜り、光栄に存じております。それと共に、私のごとき研究・教育のいずれにおいても経験の浅い者としては、大いに恐縮すると共に、いささか困惑していると言うのが率直な実情です。

初めから言い訳がましくなり、誠に申し訳ないのですが、これは決して謙遜ではなく、私の現状をそのまま申し上げております。どうぞ、先ずこの点を御理解賜りますようお願い致します。

私は、昨年3月まで大分大学教育学部に10年勤務いたしました。この間、私の本務は社会学の教師でした。人類学（「社会人類学概論」）も一コマ担当致しましたが、一般教養に人類学の講義が開設されていなかったのも、実質は一般教養の人類学と同じものにならざるをえませんでした。そして、現在神奈川大学では、一般教養の人類学を担当しております。

従いまして、御書面にある「一般教養科目としての『文化人類学』の講義を聞いたことのある学生で、専門課程の最初の段階として『概論』を履修しようとする学生を一応の講義の対象とする」ことを前提とした講義を行った経験は、他大学の非常勤を含めて皆無で

す。

勿論、私の以上のような経歴はともかくとして、私なりに御申し越しの御趣旨に沿って講義案を考えてみることは、必ずしも不可能ではありません。また、事実二、三感想を書き留めてもみました。しかしながら、それを同封されていた江口さんの講義案と対照してみると、いかにも経験の裏打ちが無く、底の浅い夢想的ないしは無責任なものに思えてなりませんでした――実際、江口氏の案とコメントには深く考えさせられる点が多く、さまざまに学ばせて頂きました。御礼申し上げます。

御送付いただいた「講義案」の書面をただ何となく埋めて御返送申しあげるのでは、余りにも誠意のないことと心得、以上のようなことをくみだしく書き連ね、先生の貴重な時間を奪ってしまったこと、お詫び申し上げます。

江口氏の案は、良く練られたもので、揺るぎない構成を持っていると思います。ただ、私個人の好み過ぎないのですが、次の諸点を補足したい誘惑に駆られます。

(1) 人類学の方法とフィールドワーク

- i) フィールドにおける課題の発見と構成――〔参考書〕松園万亀雄『グシイ』（弘文堂）、長島信弘『テソ民族誌』（中公新書）
- ii) フィールドワークの方法論――〔参考書〕マリノフスキー『マリノフスキー日記』（平凡社）、青木保『文化の翻訳』（東京大学出版会）

(2) シンボリズムならびに文化記号論

- i) 文化の記号論的な読み取り方――〔参考書〕リーチ『文化とコミュニケーション』（紀伊国屋書店）、池上嘉彦『文化記号論への招待』（岩波新書）
- ii) 象徴的次元と政治的次元――〔参考書〕コーエン『二次元的人間』（岩波新書）、ホール『かくれた次元』（みすず書房）

(3) 国家と民族――〔参考書〕中林伸浩『国家に抗する社会』（世織書房）、クラストル『国家を生きる社会』（白馬書房）

(4) 身体と文化――〔参考書〕野村雅一『しぐさの世界』（日本放送出版協会）、ダグラス『象徴としての身体』（紀伊国屋書店）

御下問に応じることのかなわぬ非力・非才を恥じつつ、愚にもつかぬことを書き記してしまいました。重ねてお詫び申し上げます。

最後になりましたが、モデルカリキュラムの恙無い完成を祈念申し上げますと共に、先生の御息災をお祈り申し上げます。

頓首

例⑥ 澤田昌人氏案

週 テーマ 参考文献・資料／視聴覚素材

- 1 霊長類の進化：黒田・片山・市川『人類の起源と進化』有斐閣、高山『ヒト・文化・文明』八千代出版。

- 2 類人猿の社会と文化Ⅰ：同上。
- 3 類人猿の社会と文化Ⅱ：同上。
- 4 類人猿の社会と文化Ⅲ：同上。／野生のチンパンジー物語（ナショナルジオグラフィック）
- 5 人間行動学：アイベスフェルト『愛と憎しみ』（みすず書房）
- 6 プロクセミクスⅠ：ホール『かくれた次元』（みすず書房）『文化を超えて』TBSブリタニカ
- 7 プロクセミクスⅡ：
- 8 ノンバーバル・コミュニケーションⅠ：野村雅一『しぐさの世界』（日本放送出版協会）
- 9 ノンバーバル・コミュニケーション：
- 10 言語によるコミュニケーションⅠ：ソシュール『一般言語学講義』、丸山『ソシュールの思想』（岩波書店）
- 11 言語によるコミュニケーションⅡ：時枝誠記『国語学原論』（岩波書店）
- 12 文化とコミュニケーション：リーチ『文化とコミュニケーション』（紀伊国屋書店）
- 13 メディアと文化変容Ⅰ：オング『声の文化と文字の文化』（藤原書店）
- 14 メディアと文化変容Ⅱ：
- 15 現代のメディア論Ⅰ：マクルーハン『メディア論』（みすず書房）、キイ『メディア・セックス』（リブレポート）
- 16 現代のメディア論Ⅱ：
- 17 現代のメディア論Ⅲ：
- 18 現代のメディア論Ⅳ：
- 19 異文化への偏見Ⅰ：サイード『オリエンタリズム』（平凡社）
- 20 異文化への偏見Ⅱ：ラッセル『日本人の黒人観』（新評論）
- 21 植民地支配から独立へーアフリカの例：ホプキンス『コンゴ 独立史』（みすず書房）
- 22 独立後の体制：Young" Rise and Decline of Zairean State"
- 23 南北問題と貧困：経済難民からエイズまで：新聞記事などの解説。
- 24 ザイール国家における狩猟採集民の位置：
- 25 ピグミーと農耕民との関係：
- 26 熱帯多雨林の生業活動：
- 27 ピグミーの歌と踊り：／ビデオ鑑賞
- 28 ピグミーの超自然的な世界：
- 29 キリスト教宣教師と地元民との乖離：
- 30 異文化理解は何をめざすのか：

私自身は「文化人類学」という講義をやっていませんので、自分の興味のおもむくままに案を作りました。

とくにカルチュア・ショックの中で、いかに異文化理解をすすめるかという意味でコミュニケーション論を、異文化への先入観はおおむねメディアによって作られると言う意味でメディア論を中心に置いています。

第22週以降は事例研究で、内外の研究者の資料のほか、スライドやビデオをふんだんに使います。「概論」にはそぐわないかもしれませんが、具体的な説明の中で、文化人類学の基本的考え方を肉付けしようとするものです。

澤田昌人氏補記

例⑦ 菅原和孝氏案

週 テーマ

参考文献・資料／視聴覚素材

(1) 序論 第1週～第2週

- 1 文化人類学とは何か：
- 2 文化人類学の歴史：ルクレール『人類学と植民地主義』
－植民地主義との関連 ガーバリーノ『文化人類学の歴史』

(2) 準備 第3週～第4週

- 3 文化と自然 I
－インセストタブーの問題：レヴィ＝ストロース『親族の基本構造』番町書房、フォックス『親族と婚姻』
- 4 文化と自然 II：『ダーウイニズムと 人間の諸問題』

(3) 身体性の基盤 第5週～第10週

- 5 セクシュアリティと婚姻I：『文化人類学：性の文化表象』ウイルソン『社会生物学』
- 6 セクシュアリティと婚姻II：伊谷『霊長類社会の構造』
- 7 食べるということI：『汚穢と禁忌』、『食と文化の謎』
- 8 食べるということII：ハリス『文化唯物論』、市川『森の狩猟民』
- 9 死と病いI：『死の人類学』、『死と病の民族誌』
- 10 死と病いII：波平『病気と治療の文化人類学』

(4) 民族誌の概観 第11週～第17週

- 11 生業と文化①狩猟採集民1：田中『ブッシュマン』
- 12 生業と文化①狩猟採集民2：ターンプル『森の民』、『エスキモーの民族誌』
- 13 生業と文化②牧畜民1：エヴァンズ＝プリチャード『ヌアー族』
- 14 生業と文化②牧畜民2：谷・福井『牧畜文化の原像』、福井『認識と文化』
- 15 生業と文化②牧畜民3：『牧畜文化考』
- 16 生業と文化③農耕民1：伊谷『自然社会の人類学』、田中・掛谷『ヒトの自然誌』
- 17 生業と文化③農耕民2：松園『グシイ』

(5) 文化とコミュニケーション理論 第18週～第27週

- 18 文化と記号論1：『記号論』、『文化とコミュニケーション』
- 19 文化と記号論2：『メタファーの記号論』
- 20 構造主義の方法1：レヴィ＝ストロース『構造人類学』
- 21 構造主義の方法2：
- 22 象徴表現とコミュニケーション1：スperlベル『象徴表現とは何か』
- 23 象徴表現とコミュニケーション2：ターナー『儀礼の森』

- 24 対面相互行為と非言語コミュニケーション1：野村雅一『しぐさの世界』
- 25 対面相互行為と非言語コミュニケーション2：『ノンバーバル・コミュニケーション』
『マンウオッチング』 小学館
- 26 会話分析1：“Everyday conversation”『エスノメソドロジーの現実』
- 27 会話分析2：
- (6) まとめ 第28週～第30週
- 28 現代の文化人類学1－民族誌への懐疑：谷 泰『文化を読む』 人文書院
- 29 現代の文化人類学2－新しい試み：マーカス・フィッシャー『文化批判としての人類学』
紀伊国民書店
- 30 現代の文化人類学3－再生の道

例⑧ 杉村和彦氏案

- | 週 | テーマ | 参考文献＋視聴覚教材 |
|----|---------------|--|
| 1 | 文化人類学と現代世界： | レヴィ＝ストロース『現代世界と人類学』
1988 サイマル出版会 |
| 2 | 文化人類学へのアプローチ： | 伊藤・米山編『文化人類学へのアプローチ』
1988 ミネルヴァ書房 |
| 3 | 文化人類学の系譜： | 綾部編『文化人類学15の理論』 1984 中央公論社 |
| 4 | 民族とは： | 川田・福井編『民族とは何か』 1988 岩波書店 |
| 5 | 文化とは： | 江口信清 ヒトと文化 1988 八千代出版 |
| 6 | 生物学的進化と文化進化： | サーヴィス・サーリンズ『進化と文化』 1976 新泉社 |
| 7 | 社会構造の多様性： | 伊谷・田中編『自然社会の人類学』
1986 アカデミア出版会 |
| 8 | 狩猟採集民社会： | 市川光雄『森の狩猟民』 1982 人文書院 |
| 9 | 狩猟採集民社会： | ブッシュマン フィルム |
| 10 | 牧畜民社会： | エヴァンズ＝プリチャード『ヌアー族』 |
| 11 | 牧畜民社会： | ヌエル族 フィルム |
| 12 | 農耕民社会： | 末原達郎『赤道アフリカの食糧生産』 1990 同朋舎 |
| 13 | 農耕民社会： | 杉村和彦『混作をめぐる焼畑農民の価値体系』
1987 「アフリカ研究」31 |
| 14 | イスラーム文化： | 片倉もとこ『イスラームの日常世界』 1991 岩波書店 |
| 15 | 都市と文化： | 米山俊直『祇園祭』 フィルム |
| 16 | 文化変容： | 松田素二「意味と力の弁証法」
谷編『文化を読む』所収 1991 人文書院 |
| 17 | 日本文化論： | 伊藤・米山編『柳田國男の世界』 |
| 18 | 日本文化論： | 柳田國男『食物と心臓』 |
| 19 | 日本文化論： | 坪井洋文『イモと日本人』 1974 未来社 |
| 20 | 自然と文化： | 田中・掛谷編『ヒトの自然誌』 1991 平凡社 |

- 21 言語と文化： 谷編『文化を読む』 1991 人文書院
- 22 芸術と文化： ザール現代音楽 フィルムNHK
- 23 宗教と文化： 岩田慶治『カミの人類学』 1979 講談社
- 24 文化人類学の考え方ー構造主義と人類学：上野千鶴子『構造主義の冒険』1985 勁草書房
- 25 文化人類学の考え方ー経済学と人類学：サーリンズ『石器時代の経済学』
1984 法政大学出版局
- 26 文化人類学の考え方ー現象学と人類学：山口昌男『人類学的思考』 1979 せりか書房
- 27 フィールドの知と現代： 川喜田二郎『野外科学論』 中央公論社
- 28 フィールドの知と現代：フィールドワークの現在：松田編「シンポジウム：フィールドが
わかるということ」「季刊人類学20-3」
- 29 フィールドの知と現代： 中村雄二郎「臨床の知・フィールドの知」 1992
『臨床の知とは何か』 岩波書店
- 30 文化人類学と21世紀の〈科学〉：フーコー『言葉と物』 1974 新潮社

依頼されました『文化人類学講義案』を送ります。福井県立大は教養の授業は全て半期ごとで、前期は「文化人類学」後期は「野外調査論」というかたちで担当しております。今年はじめて担当した「文化人類学」においては、「人間生活における豊かさとは何か」ということを一つのテーマとして現代的な課題と文化人類学的な物の見方のかかわりを重視して話しました。福井ではまだ高校卒業時点で80%以上の者が〈文化人類学〉という学問分野の存在を知らないのです。文化人類学の内容だけでなくこの学問分野が他の学問分野と比較してどのような特質、考え方を持っていることが重要であるように思いました。

杉村和彦氏補記

例⑨ 高山竜三氏案

- | 週 | テーマ | 参考文献・資料／視聴覚素材 |
|----|---------------|--|
| 1 | 野外科学の方法： | 川喜田二郎『野外科学の方法』／Vヒマラヤ技術協力 |
| 2 | フィールドワーク： | 杉本尚次『フィールドワークの方法』、川喜田二郎『鳥葬の国』／
V椎葉山物語 |
| 3 | 文化とは何か： | ／チベット人の鳥葬 |
| 4 | 文化をもつ動物・ヒト： | 香原志勢『人類生物学入門』／Vヒト・直立・言葉 |
| 5 | サルは文化・社会をもつか： | 河合雅雄『森林がサルを生んだ』／Vサル |
| 6 | 人類の起源： | 鈴木尚『化石サルから日本人まで』／V猿人・原人 |
| 7 | 人類の進化： | ／旧人・新人 |
| 8 | 文化がつくったヒト： | リーキー『入門人類の起源』／V種の存続 |
| 9 | 人種と民族： | 寺田和夫『人種とは何か』／V青い目茶色い目 |
| 10 | 環境をどうとらえるか： | 吉良龍夫『生態学から見た自然』／SV生態系 |
| 11 | 熱帯多雨林と採集狩猟民： | 市川光雄『森の狩猟民』／V森の狩人ムブティ |
| 12 | 砂漠と採集狩猟民： | 田中二郎『砂漠の狩人』／V砂漠の狩人サン |

- 13 環境と農耕の起源：中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』
- 14 熱帯林と農耕：／Vイモ、S熱帯の焼畑
- 15 サバナと雑穀農耕：中尾 前掲書／Vサバナ農耕文化
- 16 オアシスと麦作農耕：中尾 前掲書／V地中海農耕文化
- 17 新大陸とその農耕文化：中尾 前掲書／Vアンデスのケチュア
- 18 照葉樹林とその農耕文化：上山春平編『照葉樹林文化』／イネの道
- 19 乾燥地と牧畜文化の成立：梅棹忠夫『狩猟と遊牧の世界』／V乳製品
- 20 環境と生活様式・文化：
- 21 集団をつくる人間：
- 22 共同体のしくみ：
- 23 素朴から文明へ：川喜田二郎『素朴と文明』／V都市文明、S都市国家から文明へ
- 24 東アジア・中国文明：
- 25 東アジア・チベット文明：高山竜三『失われたチベット人の世界』／Vチベット人村
- 26 西アジア・イスラム文明：／S西アジア
- 27 南アジア・インド文明：／Sインド、Vカースト制
- 28 南アジア・ヒマラヤの諸文化：／Vヒマラヤ
- 29 東南アジア文明：岩田慶治『日本文化の起源』／S東南アジア
- 30 日本文明

V：ビデオ：記録映画、映像などをビデオに編集したもの。

S：スライド：撮影・作成・編集したスライド。

目下新しいテキストを準備中。

高山竜三氏補記＊

＊なお、このテキストは『環境・人間・文化』1993として八千代出版から刊行された。

例⑩ 滝口直子氏案

- | 週 | テーマ | 参考文献・資料／視聴覚素材 |
|----|------------------------------------|---------------|
| 1 | 文化人類学とは（文化の概念、人類学の範囲、自民族中心主義など）： | |
| 2 | 理論の発展（18世紀～20世紀前半）：ガーバーノ『文化人類学の歴史』 | |
| 3 | 理論の発展（20世紀後半～現在）：同上 | |
| 4 | 現地調査（方法、技術）：マリノフスキー『西太平洋の航海者たち』 | |
| 5 | 現地調査（人間的要素）：ラビノー『異文化の理解』 | |
| 6 | 言語（人間の言葉の特徴、認知と言語）：ヒッカーソン『ヒトとコトバ』 | |
| 7 | 言語（社会と言語）：サピア『言語、文化、パーソナリティ』 | |
| 8 | 同上 | 同上 |
| 9 | 認知（人間の知覚と認知）情動：コール＋スクリブナー『文化と思考』 | |
| 10 | 社会化（フロイト・ピアジェ・ヴィコッキー）：左記の人々の学説の入門書 | |
| 11 | 社会化（ホワイティングの6つの文化）：ヤホダ『心理学と人類学』 | |
| 12 | 伝統社会のイニシエーション：／ビデオ教材NHK衛星放送から | |

- 13 遊びと芸術：ベイトソン『精神の生態学』
- 14 夏休みの課題の説明（友人、家族などからの簡単な調査）
- 15 調査
- 16 宗教（世界観）：ギアツ『文化の解釈学』
- 17 宗教（神話と儀礼）：リーチ『レヴィ＝ストロース』、ターナー『儀礼の過程』
- 18 儀礼に関する映像：／ビデオ教材NHK衛星放送から
- 19 社会の形態（親族）：フォックス『親族と婚姻』
- 20 社会の形態（結婚と家族）：エヴァンス＝プリチャード『ヌアー族の親族と結婚』
- 21 社会の形態（親族以外の社会組織）：
- 22 経済（生業）：サーリンズ『石器時代の経済学』
- 23 経済（生産・分配・消費）ダグラス、シャイウッド『「儀礼」としての消費』
- 24 ブッシュマン、ピグミー、南米インディアン：／ビデオ教材NHK衛星放送から2
- 25 現代の世界システム：ウォーラステイン『近代世界システム』
- 26 応用人類学（医療など）：アンダーソン『医療人類学』など
- 27 応用人類学（開発など）：
- 28 夏休みの課題の結果の紹介と批評：
- 29 同上
- 30 まとめ：人間の存在の多様性と普遍性の理解を目指して

- ・ Schultz and Lavenda “Cultural Anthropology” 2nd ed. (翻訳中) に沿って組み立てています。
- ・ 学生に「問題意識」を持たせるようにしたい。
- ・ 具体例から入らないと抽象的なことはわかりにくいようある。
- ・ 視覚教材（NHK衛星放送など）を使う。

滝口直子氏補記。

（なお、原案は前記14回、後期13回の計画であったが、30回に補正した）

例⑪ 田中雅一氏案

- | | | |
|---|-----|---------------|
| 週 | テーマ | 参考文献・資料／視聴覚素材 |
|---|-----|---------------|
- 1 自然と文化： 全体としてサービス『民族の世界』
米山・谷編『文化人類学を学ぶ人のために』
 - 2 フィールドワーク：
 - 3 学説史(1) 進化論、機能主義：
 - 4 学説史(2) 象徴分析
 - 5 狩猟採集民 アンダマン：ラドクリフ＝ブラウン『アンダマン島民』
 - 6 狩猟採集民(2) サン ：田中二郎『砂漠の狩人』『ブッシュマン』
／Bitter Melon 35mins, Initiation 13mins.
 - 7 狩猟採集民(3) アボリジニ：／Desert People 51mins.

- 8 狩猟採集民(4) ヘヤ : 原ひろ子『ヘヤーインディアンとその世界』
- 9 遊牧民(1) ヌエル 1 : エバンス=プリチャード『ヌアー族』
／ The Nuer 1, The Nuer 2, 75mins.
- 10 遊牧民(2) ヌエル 2 : エバンス=プリチャード『ヌアー族の親族と結婚』
- 11 遊牧民(3) ヌエル 3 : エバンス=プリチャード『ヌアー族の宗教』
- 12 遊牧民(3) ベドウィン: 片倉もと子『アラビアノート』
- 13 根栽農耕民(1) トロブリアンド 1: マリノフスキー『西太平洋の航海者たち』／
／ Trobriand Islanders 67mins, Music in Trobriand 48mins
- 14 根栽農耕民(2) トロブリアンド 2: マリノフスキー『未開人の性生活』『未開社会の犯罪
と慣習』
- 15 根栽農耕民(3) トロブリアンド 3: マリノフスキー『日記』
- 16 根栽農耕民(4) ダニ 1: Heider、本多勝一NHK『ファッション・ドリーム』
- 17 根栽農耕民(5) ダニ 2: ／ The Dead Birds 83mins
- 18 稲作農耕民(1) 日本:
- 19 稲作農耕民(2) 南インド: ／ Village India, 60mins.
- 20 焼畑農耕民(1) テンボ : 末原達郎
- 21 焼畑農耕民(2) エンデ : 中川敏
- 22 漁民 スリランカ : 田中雅一
- 23 男と女・家族と結婚: : 中根千枝『家族の構造』
- 24 親族: : フォックス『親族と婚姻』
- 25 子供から大人へ: : 小川 了
- 26 老人と祖霊:
- 27 神の世界:
- 28 宗教と政治(1) 部族
- 29 宗教と政治(2) 王権
- 30 民族と国家

例⑫ 村瀬智氏案

- 週 テーマ : 参考文献・資料／視聴覚素材
- 1 文化人類学とは: 米山俊直1967『文化人類学の考え方』講談社。
 - 2 ヒトと文化: クラックホーン1971『文化人類学の世界』講談社。
 - 3 フィールドワークと民族誌: 本多勝一1967『極限の民族』朝日新聞社。
 - 4 生業と経済(1) 狩猟採集民社会と文化: 田中二郎1990『ブッシュマン』思索社。
 - 5 生業と経済(2) : ／〈クンブッシュマン〉フィルム鑑賞。
 - 6 生業と経済(3) 牧畜民社会と文化: 松原正毅1983『遊牧の世界』中央公論社。
福井勝義・谷泰編『牧畜文化の原像』日本放送出版協会。
 - 7 生業と経済(4) : ／〈ヌエル族〉フィルム鑑賞。
 - 8 生業と経済(5) : 農民社会と文化: 祖父江孝男1988『稲からみたアジア社会』放送大学教育振興会。

- 9 生業と経済(6) : / <アジアの農村> スライド鑑賞。
- 10 政治と経済(1) 法と慣習：マリノウスキー 1967『未開社会における犯罪と慣習』新泉社。
- 11 政治と経済(2) 権力と統治：フォーティス・エバンス＝プリチャード1972『アフリカの伝統的政治体系』みすず書房。
- 12 政治と経済(3) 所有と分配：ポランニー1975『経済と文明』サイマル出版会。
- 13 政治と経済(4) 贈与と交換：モース1973『社会学と人類学』弘文堂。
- 14 社会組織(1) 婚姻と家族：和田正平1988『性と婚姻の民族学』同朋舎。
- 15 社会組織(2) 親族組織：フォックス1977『親族と婚姻』思索社。
- 16 社会組織(3) 地域社会：レッドフィールド1960『文明の文化人類学』誠信書房。
- 17 社会組織(4) 集団形成：米山俊直1966『集団の生態』日本放送出版協会。
- 18 社会組織(5) : / <インドの社会> スライド鑑賞。
- 19 言語と文化：鈴木孝男1975『言葉と社会』中央公論社。
- 20 言語と民族：京都大学人類学研究会1974『目でみる人類学』ナカニシヤ出版。
- 21 文化の動態：サリンズ・サービス1976『進化と文化』新泉社。スチュワード1976『文化変化の理論』弘文堂。
- 22 宗教と文化(1)：岩田慶治1970『カミの誕生』淡交社。
- 23 宗教と文化(2) : / <超自然観と宗教> ビデオ鑑賞。
- 24 芸術と文化(1)：藤井知昭1978『音楽以前』日本放送出版協会。
- 25 芸術と文化(2) : / <民族芸術と音楽・芸能> ビデオ鑑賞。
- 26 現代社会と宗教・芸能：村瀬智1992「バウルの唄がきこえる」「季刊民族学61」
/ <ベンガルのバウル> スライド・テープ鑑賞。
- 27 都市と民族(1)：綾部恒雄1985『民族とエスニシティ』アカデミア出版会。
- 28 都市と民族(2) : / <カルカッタ> スライド鑑賞。
- 29 在日外国人と日本社会：田中宏『在日外国人』岩波新書、粉川哲夫1991『国際化のゆらぎの中で』岩波書店。
- 30 文化人類学と21世紀世界

例⑬ 米山俊直私案

(1992年度文化人類学講義案をもとに作成した。実際には通年で26回しか講義ができなかったが、ここでは30回に修正してある。なお、視聴覚素材は、本年度は手渡した講義案のほかは用いていない。参考書として米山俊直・谷泰編『文化人類学を学ぶ人のために』1991世界思想社をあげてあった。)

週 テーマ 参考文献・資料

1 I. 文化人類学とは(その1) : パラダイムI生存と実存*

*パラダイムI : 現実を分光器にかけるようにして生存のレベル(個体の呼吸、摂食排泄、新陳代謝など)と実存のレベル(思考、記憶、観念、意志、感情、世界観など)の二つに分けると、その間に生存のレベルの側に生態系、実存のレベルの側に文化系のシステムをシステムとして

構想でき、その中間に社会系のシステムの存在が構想できる、したがって、それを生態系、社会系、文化系の3つの相互に関連する系の累積としてとらえ、生態系と社会系を媒介するものとして経済、技術が、社会系と文化系を媒介するものとして言語、記号、象徴をあげることができる、というパラダイム。

2 (その2)：生態系と社会系の媒介者・空間論・パラダイムⅡ*

*パラダイムⅡ：人間－環境システムには、ひと－もの、ひと－こと、ひと－ひと、ひと－ところの4種類がある。

3 (その3)：社会系と文化系の媒介者・時間論・進化論。

4 Ⅱ. 生態系 i. 湿潤熱帯：イバンの場合(フリーマン)、テンボの場合(米山・末原)

5 ii. 乾燥熱帯：ヌエルの場合(エバンス=プリチャード)

6 iii. 照葉樹林帯(雲南諸民族)と地中海気候(モロッコ)

7 iv. ツンドラ・タイガ(ツングース、イヌイト、ラップ)

8 v. オセアニア(トロブリアンド)

9 Ⅲ. 社会系 i. 血縁集団組織

10 ii. ナヤールの場合(母系社会の例)：中根千枝『家族の構造』、ガフ。

11 iii. バンバラの場合(父系社会の例)：ディーテルラン、米山、赤阪。

12 iv. 地縁集団組織イラクの場合：米山、和田、ウインター。

13 v. アソシエーション・社縁集団

14 Ⅳ. 文化系 i. 「原始宗教」・呪術・邪術。

15 ii. 大宗教と文明。

16 iii. ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』カイヨワ『遊びと人間』

17 iv. 柳田國男『故郷七十年』宮本常一『民族学の旅』

18 v. クーン『科学革命の構造』ケストラー『ホロン革命』

19 vi. 福井勝義『認識と文化』、松井健『自然認識の人類学』

20 vii. レヴィ=ストロース『野生の思考』『今日のトーテミズム』

21 viii. デル・ハイムズ『ことばの民族誌』

22 ix. ホール『沈黙の言葉』『隠れた次元』

23 *. フーコー『言葉と物』

24 □. ギアツ『ローカル・ノレッジ』

25 V. 文明社会の諸問題(その1-1)：都市化の時代。マンフォード『都市の文化』

26 (その1-2)：とし現象の問題。ルイス『貧困の文化』

27 (その2)：民族対立の時代：ローネン『自決とは何か』

28 (その3)：国際化時代：

29 (その4)：コミュニケーションの時代

30 VI. 全体のまとめ：

5. モデル・カリキュラム試案

さて、いよいよ私たちのモデル・カリキュラムを作成しなければならない。研究会の記録は付録としてその全文をつけてあるが、その議論の中からもうかがえるし、またこれまで紹介してきた諸氏の案からも明瞭に読み取れることは、文化人類学は、それぞれの教師の構想にしたがって、極めて個性的な形で教授されているということである。しかし、非常に個性的であっても、さすがにどの案も文化人類学がどのような学問であり、それがどのように教授されねばならないか、という点は、実に驚くべきことであるが、大きい相違はないのである。したがって、ここに示している試案はどこまでもそのようなサンプルのひとつに過ぎないことをおことわりしておきたい。

全体として、15の単元からなり、それぞれに2週ずつをあてている形にしてあり、その単元と関係のあるような、基礎的項目群を集めている。テーマはそれを代表するような項目をあててある。それに続いて参考文献・資料をあげ、最後に／で区分して望ましい視聴覚素材を例示してある。ただし、これら素材の入手方法、市販か否か、どのような形で存在しているかについての追求は、時間の余裕がなかったのでしていない。今後に残された課題である。

単元① イントロダクション：

第1週：文化人類学とは。文化の定義。個別文化と文化一般。高文化、慣習の科学。人間の研究。文化の研究。：Kroeber + Kluckhohn “Culture” ベネディクト『文化の型』、その他。／挨拶行動など、文化差を示す映像。人間行動学のフィルムなど。

第2週：文化人類学の発達の概略の歴史：先史時代としての啓蒙主義の時代。19世紀進化論の時代。1922年の2著（マリノフスキーとラドクリフ＝ブラウン）以後のフィールドワーク中心主義への転化。機能主義、構造－機能主義、構造主義。独逸の文化圏説。電波主義、歴史主義、心理人類学。新進化主義、象徴人類学、解釈人類学、生態人類学、認識人類学。など。：N・S・ガーバーリー『文化人類学の歴史』新泉社1987。綾部恒雄編『文化人類学者群像』全3巻1985～88。

単元② フィールドワーク

第3週：フィールドワークの実際：佐藤郁哉『フィールドワーク』新曜社1992。

HRAF “Outline of World Culture” & “Outline of Cultural Materials” Royal Anth. Inst. “Notes and Queries”, 柳田國男、関敬吾『日本民俗学入門』改造社。

第4週：ノート、写真、8ミリビデオの利用法、面接の仕方など。：ラングネス＆フランク『ライフヒストリー研究入門』ミネルヴァ書房1993。／実際の操作説明などの映像。

単元③ 民族の多様性：

第5週：民族とは何か：川田順造・福井勝義編『民族とは何か』岩波書店1988。

第6週：民族誌とは何か：例；山下晋司『儀礼の政治学』弘文堂1988。／適切な民族誌的映像（例：クラ儀礼）など。

単元④ 文化の背景としてのヒト

第7週：動物進化の中のヒトの位置：立花隆『サル学の現在』平凡社1991。河合雅雄『人間の由来』2巻、小学館1992。／進化の道程がわかるような映像。

第8週：直立二足歩行の意味：香原志勢『人間生物学入門』中央公論社1975. 黒田末壽・片山一道・市川光雄『人類の起源と進化』有斐閣1987. 菅原和孝『身体的人类学』河出書房新社1993／行動学的なビデオ、フィルム。(マックスプランク研究所)

単元⑤ 環境と文化：

第9週：大気候分布と生態系：吉良龍夫『生態学から見た自然』河出書房新社。

第10週：環境と文化の関係：石毛直道編『環境と文化』日本放送出版協会。

単元⑥ 言語・思考・認識・文化

第11週：言語と文化：サピア & ワーフ他『文化人類学と言語学』弘文堂1970. ソシユール『言語学序説』他

第12週：思考と認識：福井勝義『認識と文化』東京大学出版会1991. 松井健『自然認識の人類学』どうぶつ社。

単元⑦ 経済生活：

第13週：生業形態：狩猟採集、農耕、牧畜、商工運輸など都市的生業：サービス『民族の世界』講談社。サーリンズ『石器時代の経済学』法政大学出版局。伊谷純一郎・田中二郎他『自然社会の人類学』アカデミア出版会1986. 本多勝一『極限の民族』朝日新聞社／さまざまな民族のドキュメンタリー・フィルム。

第14週：経済人類学の特色・社会経済の進化：ポラーニ『大転換』『経済と文明』、山内昶『経済人類学の対位法』世界書院1992. メマリー・ダグラス 浅田彰他訳『儀礼としての消費』新曜社1984. マリノフスキー+ラ・フェンテ信岡奈生訳『市の人類学』平凡社1987。

単元⑧物質文化：

第15週：発明発見・伝播：リップス『鍋と帽子と成人式—生活文化の発生』八坂書房1988. 中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』岩波新書。石毛直道『食卓の文化誌』岩波書店1993。

第16週：衣食住・楽器・武器・あそび道具：生活文化研究所『衣服人類学』啓文社1990. 石毛直道『乳利用の民族誌』中央法規1992. 石毛直道『住居空間の人類学』鹿島出版会1971. 青柳まち子『「遊び」の文化人類学』講談社1977. /物質文化関係の映像。例：籠作り、農具、凧、球技の歴史など。

単元⑨ 宗教と世界観：

第17週：アニミズムの世界：デュルケム『宗教生活の原初形態』岩波文庫。岩田慶治『日本文化のふるさと』角川書店。古野清人『原始宗教』三一書房。吉田禎吾『宗教人類学』東京大学出版会1984. ルイス『エクスタシーの人類学』法政大学出版局。/アニミズム関係の映像。例：北方シャーマニズム。韓国の巫女の儀礼。アイヌ熊祭り。沖縄のノロ神事など。

第18週：世界宗教と社会：ゲルナー『イスラム社会』。五来重『仏教と民俗』角川書店。アストン『神道』。森田三郎『祭りの文化人類学』世界思想社。米山俊直『祇園祭』中公新書1974. ターナー『儀礼の過程』思索社1976. /世界の各地の祭礼行事の映像例えば祇園祭、リオのカーニバルなど。聖地例えばメッカ、バチカン、ルルド

など。

単元⑩ 神話・口頭伝承：

第19週：神話の諸相：大林太良『神話の系譜』青土社1986。伊藤清司・大林太良・吉田敦彦『神話への招待』日本放送出版協会1978。上田正昭『日本の神話を考える』小学館1991。カーメンスキー、ステブリン 菅原他訳『神話学入門』東海大学出版会1980。大林太良『神話学入門』中央公論社1966。山口昌男『アフリカの神話的世界』岩波書店1971。

第20週：口頭伝承：川田順造『口頭伝承論』河出書房新社1992。柳田國男『「郷土生活の研究法」「民間伝承論」ほか』（柳田國男全集28）筑摩書房1990。柳田國男『「口承文芸史考」「昔話と文学」「昔話覚書」』（柳田國男全集8）筑摩書房1990。柳田國男『「遠野物語」「山の人生」「史料としての伝説」』（柳田國男全集4）筑摩書房1990。

単元⑪ 呪術と医療

第21週：呪術研究：ライアル・ワトソン 村田恵子訳『アフリカの白い呪術師』河出書房新社1983。カズヌーヴ, J. 宇波彰訳『儀礼・タブー・呪術・聖なるもの』三一書房、佐々木宏幹『聖と呪力』青弓社1989。吉田禎吾『呪術』講談社1970。

第22週：医療人類学：波平恵美子『病気と療の文化人類学』海鳴社1984。波平恵美子『病むことの文化』海鳴社1990。波平恵美子『病と死の文化』朝日新聞社1990。ロマヌッチ＝ロス他編『医療の人類学』海鳴社1989。ロック, M. 中川米造訳『都市文化と東洋医学』思文閣1990。フォスター・アンダーソン 中川米造訳『医療人類学』リポート1987。医療人類学研究会編『文化現象としての医療』メディカ出版1992。

単元⑫ 人生・ライフサイクル・ライフヒストリー

第23週：人生：ファン・ヘネップ（ヴァン・ジェネップ）綾部恒雄他訳『通過儀礼』弘文堂1977。綾部恒雄編著『新編人間の一生』アカデミア出版会1985。ミード, M. 畑中幸子他訳『サモアの思春期』蒼樹書房1979。松岡悦子『出産の文化人類学』海鳴社1985。原ひろ子『子どもの文化人類学』晶文社1979。原ひろ子・我妻洋『しつけ』弘文堂1974。江渕一公『教育人類学』祖父江孝男編『現代の文化人類学②』所収、至文堂1982。片多順『老人と文化』垣内出版1981。

第24週：ライフサイクル・ライフコース・ライフヒストリー：エリクソン, E., 小此木啓吾訳『自我同一性』誠信書房1973。プラス, D. W. 井上俊他訳『日本人の生き方』岩波書店1985。オスカー・ルイス、高山智博訳『貧困の文化—五つの家族』新潮社1970。ラングネス, L、フランク, G., 米山俊直、小林多寿子訳『ライフヒストリー研究入門』ミネルヴァ書房1993。

単元⑬ 社会組織・年齢集団・性別集団・社縁集団

第25週：社会組織：マードック, G. P、内藤莞爾訳『社会構造』新泉社1978。ラドクリフ＝ブラウン青柳真知子訳『未開社会の構造と機能』新泉社1975。レヴィ＝ストロース、馬淵東一他訳『親族の基本構造』番町書房1949。キージング 小川正恭他訳『親族集団と社会構造』未来社1982。フォックス, R. 川中健二訳『親族と婚姻』思索社1977。

第26週：年齢集団、性別集団、社縁集団：和田正平『性と結婚の民俗学』同朋舎1988。ロザルド、M・Z., 山崎カオル訳「女性・文化・社会」『男が文化で女が自然か?』所収、晶文社1987。サーヴィス、E. R., 松園万亀雄『未開の社会組織』弘文堂1979。米山俊直『集団の生態』日本放送出版協会1966。

単元⑭ 法・秩序・戦争と平和。

第27週：法と秩序の人類学：ホーベル、E. A., 千葉正士・中村孚美訳『法人類学の基礎理論』成文堂1984。ジークリスト、C., 大林太良訳『支配の発生』思索社1975。

第28週：戦争と平和の人類学：石川栄吉他『生と死の人類学』講談社1985。内堀基光・山下晋司『死の人類学』弘文堂1986。戦時下日本社会研究会『戦時下の日本』行路社1992。

単元⑮ 政治・歴史・文明。

第29週：政治人類学：山下晋司『儀礼の政治学』弘文堂1988。ロウイ、R., 古賀英三郎訳『国家の起源』法制大学出版局1973。中林伸浩『国家を生きる社会』世織書房1991。レヴィ＝ストロース、川田順造、渡辺公三訳『現代世界と人類学』サイマル出版会1988。ダヴ・ローネン 浦野起央他訳『自決とは何かーナショナリズムからエスニック紛争へ』刀水書房1988。山口昌男『歴史・祝祭・神話』中央公論社1974。バランディエ、G., 中原喜一郎『政治人類学』合同出版1977。クラストル、P., 渡辺公三訳『国家に抗する社会』書肆風の薔薇1987。

第30週：歴史と文明ーしめくくりとして：マークス・フィッシャー 永渕康之訳『文化批判としての人類学』紀伊国屋書店1989。湯浅赳男『文明の歴史人類学』新評論1985。米山俊直『同時代の人類学』日本放送出版協会1981。

6. おわりに

本研究は、この報告書の「はじめに」で述べておいたように、放送教育開発センターの企画によって、文化人類学の専門コース講義案を構想することになった。東大、都立大、一橋大のような老舗ではどのように講義が行われているか、実態調査をすることも考えたけれども、むしろアマチュア集団的なところがある関西のほうの動きを見ておくことも一興かと思って、頼みやすい人達にアンケートを依頼し、また集まりやすい人達の大談論風発を期待して研究会を試みた。その成果がこの報告書である。じつはこの他に、準備作業として、これも簡単に手に取ることのできた教科書、参考書の類を集積して、その目次ページをコピーし、研究会の資料として席上配布した。この報告書にも付録資料としてつけておこうと思ったが、紙幅がかさむのでやむなく、そのリストだけをつくることにした。

モデル・カリキュラム試案も、これが最良というわけではなく、それぞれの教師が工夫をして組み立てて行くことが良いと思う。画一的な枠組みを固定化することほど、文化人類学の精神に反することはないだろう。この研究の過程でご自身の案を示して下さった高山龍三教授は、その構想に添った教科書『環境・人間・文化』（八千代出版1993）を出版された。フィールド経験を十分に生かしたよい教科書である。このような形で展開が見られるとすれば、このプロジェクトも有用であったといえよう。

文献のリストをつけることも考えたのであるが、それも時間の余裕がなくて果たせなかった。いろいろと不備の点は、どこまでもコーディネーターの責任であることをお断りしておく。最後にこの研究に対してアンケート、研究会などご協力をいただいた皆さん、またセンターの研究協力課の皆さんに感謝して筆をおくこととする。

1993年2月15日

米 山 俊 直

付録資料(1) 研究会記録

『学部専門教育カリキュラムの研究開発』

(モデル・カリキュラムの制作)

「文化人類学概論」研究会 1992.7.20 (月)、13:00～17:00 於：京大会館

「文化人類学のエデュケーショナル・デザイン」

1) 文化人類学をどのように教えるか

(1) この研究会の発足の経緯と意図

米山 きょうは、いまお配りしたレジメの話題に沿った形で議論を進めたいと思います。

要するにこれは、放送教育開発センターの「学部専門教育カリキュラムの研究開発(モデル・カリキュラムの制作)」というプロジェクトの中の、「文化人類学概論」の研究会ということになっております。すでにおまわりました手紙でご了解いただいていると思いますが、じつは加藤秀俊センター所長から手紙が参りまして、樺山紘一さんが「史学概論」を担当して、私が「文化人類学」をやってみませんかというご依頼でした。

「①1年30週をどのように段階的に設計するのが学生にとって理解しやすいか。②各週ごとに、どのようなリーディング・アサインメントを学生に与えるのが適切か。③どのような視聴覚素材をどの場面で利用するか。④学生と教授のあいだで質疑応答、討論をするためにどのような技法があるか。⑤学問の性質上、実習、調査などが必要なばあい、それをどう計画し、またそれを講義とどのように連結させることが望ましいか。

要するに、これは若い講師、助教授などがはじめて教壇に立ったときの手引になるような教授法の“虎の巻”のようなもの、とお考えいただいても結構です。あるいは、アメリカの大学でのシラバスのようなもの、といってよいかもしれません。

そして、そのために京都で数人の共同研究班を組織していただき、来年1月までに完成していただけないでしょうか。」というようなことでしたので、いちおうこのプロジェクトを承諾して、みなさんに研究協力者としてお集まりいただいたわけです。

きょう第1回の集会をして、その結果をなんとかまとめてみたいと考えております。そしてとりまとめたものをみなさまに回覧して、ご確認をいただいたらいいかなと考えております。責任は私と福井さんとで持ちましょうということにしてありますので、そういうふうにご了解いただきたいと思います。

この研究会の発足の経緯は、こういうことでご理解いただきたいと思います。しかし、意図のほうは、どうもこういうことをするのは文部省が枠をはめて押し付けるための陰謀なのではないか、ということを心配される方もなかにはあるかもしれませんが、私はそんなふうには考えておりません。たくさんこういう研究会があって、たとえばこれで京都大学スタイルというのができるとすれば、大阪大学スタイルというのが別にできてもかまわないし、東京大学スタイルがあっても、筑波大学スタイルがあっても、都立大学のスタイルがあっても、それぞれの大学のスタイルがあってもよいのだと。あんまり意識していただく必要はないと思っています。

ただ、きょう出席をお願いした先生は、欠席者も含めて大部分が京都大学で非常勤を担当していただいた方たちです。教養部のほうで一年間あるいは数年間「文化人類学」を担当していただきました。全部をカバーしているというわけではありませんが、そういうことできょうの人選をさせていただきました。

(2) 文化の翻訳と教育

どのように教えるかということを、エデュケーション・デザインと書きましたが、この言葉は、最近新聞の切抜きをしておりましたら誰かが使っていたもので、なかなかいい言葉だなと思ってそのまま真似をしたのです。要するに、われわれの職業としての文化人類学は、一種の文化の翻訳をやっているわけで、Aという文化の話を聞いてきてJ、つまり日本語という文化に翻訳すると役割をやっているのだと、簡単に言えばそういうことだといってもいいと思います。もちろんそれを基にして理論構築その他のことがあるわけですが、大前提にはトランスレイション・オブ・カルチャーがあると考えていいと思います。

しかし、トランスレイトすることとエデュースすることはちょっと違うんです。エデュケイトというのは、何にも知らない人に向かって、文化人類学というものがあるんだよ、ということをお教えるといったらいいいのでしょうか、そのあたりのことがエデュケーションということになると思います。ただ、何にも知らないといっても知らない程度はいろいろありまして、ほんとうに何にも知らない、文化人類学という言葉も知らないレベルから、かなり聞きかじっているとか、ポピュラーな言葉としての文化人類学は知っているという人に対しての教育、という問題がありうると思います。そのあたりをご議論いただければいいかなと思います。

話題として取り上げていただければ、と思うことを9つほど並べてみました。これは、最初に加藤さんの手紙にもあったことを含めてのことです。そもそも文化人類学とはなにか、ということをお話ししたらきりがありません。ここでは、なにもそこまでしつこく考える必要はないと思いますが、きわめて常識的に、文化人類学というのは人類学の一部であり、大きく自然人類学と文化人類学とに分けて、主として人間の文化的な側面を中心に扱う分野であるとおおまかに考えておいていいのではないかと思います。ただ人間を中心にしてますから、当然のことながら、自然環境というものも入りますし、自然的存在としての人間というものも入ってくるわけですから、人類学を全体として考える場合には、自然的な側面を無視することはできません。ここでは、文化的な現象と自然現象としての人間の問題とに大きく分けておいて、その文化的な側面を扱う分野だというふうに考えておいたらいいいのではないかと思います。この場合の文化という定義は、繰り返す必要はないと思います。広義の意味でのカルチャーというつもりで考えております。

それではこの項目に沿って進めてまいりたいと思いますが、最後の「⑩今後の予定」について構想だけお話ししておきます。まず、これをきちんとした報告書にしたいと思っています。それから、できればこれを出版したい。出版物として、この議論を中心に多少加筆などして、これから申しあげるアイデアの資料などもつけて出版したいと思っています。資料というのは、きょうご欠席の方たちも含めて広い範囲の人たちにアンケートを出していただいたものが基盤になっています。具体的には、簡単な講義案、つまりシラバスを、たとえば江口さんが作ってくれたようなものをサンプルにして資料として使うわけです。実際にやっていることでも理想

型でもどちらでもいいということで作ってもらいました。それときょうのディスカッションを中心に、1冊の本にまとめたかどうかと考えております。もっともこれは私が考えているだけで、センターに提出するレポートだけでおしまいということになるかもしれませんが。とにかくそういうかっこうで最終的に収斂したいと思っています。

2) 計画性とアドホックと：フィールド・ワークの経験主義

米山 それでは話を前に戻し、①と②を連続させるような形で、みなさまにご経験をおうかがいしていくのが手っとり早いかなと思います。

突然ですが、まず、掛谷先生のアイデアをおうかがいできますか。地震があったときに、弘前大学の仕事としてちゃんとしたレポートが出ていますね。その中心となられたのが田中さんをはじめとする文化人類学の研究室ですね。学生たちも参加しているわけですが、そのあたりの経験を含めて、研究室の運営とか、学生の教育の経験も含めてお話いただけたらと思います。

掛谷 いま米山先生にご紹介いただいたのですが、考えてみたら10なん年かいろんなところをまわりましたが、文化人類学を教えたことがあったのかな。文化人類学といわれるものに足を置いていることは確かなのですが、それと他との関係の中で講義もしてきたと思います。文化人類学についていいますと、筑波大学の経験と弘前大学でやったことがあります。とくに筑波での経験は、ある意味ではおもしろかったです。

筑波には、いま米山さんが紹介された言い方をしますと、東大の文化人類学を出てこられた方と都立大の文化人類学を出てこられた方、それに京都から行った私とがセットになっていました。そのほかに、民俗学、日本のフォークロアの方々がおられて、その配置の中で何をしゃべるかということがいちばん大きな問題でした。なんんかの先生が回りもちで、「文化人類学概論」の講義をやったこともあります。そのほか川喜田二郎さんという大家がおられましたから、そういう先生を交えて、いろんな教師がいる中で、自分がどういうことをしゃべるか、ということが一番のポイントだったような気がします。

私の目からみますと、東大や都立大学の人類学は非常に正しい人類学で、学説史などをぴしっとやっておられるわけですね。私は学説史などは苦手ですし、筑波にいるときは「外道の人類学」と称しておりました。学説史は、たいへん大切だけれどもたいへん退屈だろう、おもしろくないだろう。だけど実際やっていることはちがうんだ、人類学とはこんなにおもしろいんだ、というところを基本において、たいへん経験主義的な、そしてフィールド・ワークに即した形のものを提示してきました。私は個別の知識はあんまり知らんと。おもしろいと思ったらみんなが勝手にそのおもしろいものを探していくだろうから、人類学のおもしろさの部分を、私自身のフィールドワークの体験、あるいは同僚や仲間から見聞きしたことを紹介して講義していたように思います。そのへんは学生さんたちもちゃんとわきまえていたのだらうと思います。あえていうならば、何人かの教師がいる中で、あるいはまた正しい人類学との関係の中で、人類学は本来外道になるのが本筋だぞというようなことをはぐらかしては、人類学をやることのおもしろさとかポイントを主として、経験主義的な部分に足がかりを置きながら、しゃべってきたように思うんです。

ところが弘前大学に行くと、集まっているのが外道の人ばかりで、いままでとはまったく違

う。その中でいちばん年上はぼくだというので、本流というか正しい人類学をやらんといかんのかなということになったのです。そんなこと私にはとてもできない。それでは全員で外道に徹しようということになりました。外道に徹するというのはどういうことかといいますと、講義はイントロダクションの部分も含めて、それぞれの関心事の中心を話したのですが、その中でインテグレイションの役割をはたしたのが実習でした。

弘前大学の場合かなりきつくて、毎週土曜日一日かけて一年間という時間割で、その時間の使い方は自由です。人間行動論コースと名付けられた7人のスタッフがあり、人類学関係が4人と社会学と社会心理学、それから当時は宗教学のメンバーが集まりましたが、とくに地方大学ということもありまして、弘前、あるいは津軽に深く関連した問題を具体的なフィールドワークを通して、実習と教官自身の共同研究も全部まぜて調査しました。学生さんにも、実習という名のもとにいままでやってきたことを単に追体験してもらおうということではなく、状況の違う教官が集まって共同研究する中に巻き込んで調査をするという形をとりました。その中で外道の人たちがそれぞれ好き勝手なことをいってるけれども、なんかテーマをやってみると、ああこんないろんな見方があって、こういう形でまとまっていくんだなあ、というのを学生といっしょにやってみた。そんなことではないか、と思うんですけれども。

米山 ちょっと最初のところの確認なんですけれども、何人かの人が共同でひとつの講義をされたわけですか。

掛谷 はい。概論のときに。

米山 何人ぐらいでされたのですか。

掛谷 それは年によって違うんです。ときには一人ですが、今年は何月から何月まで海外に行くから、そのあいだを埋めなければいけないとかいうことも含めて、そのときどきのスタッフの動きに対応した形でしました。一人から3人ぐらいです。

米山 そのあいだではコミュニケーションをちゃんとして、分業の約束みたいなのはあったのですか。

掛谷 大まかにです。だいたいその人のことはわかってますから、ひとことふたこと交わすだけです。

米山 そのへんのことはあうんの呼吸でやらないとしょうがないわけですね。あらかじめセットされたシラバスがあって、そのなん章を担当するという形ではないのですね。

それではいまのご発言をふまえて何かご意見があればお話しください。

掛谷 文化人類学のセンスのある学生がおもしろいと思って何かをぱっとやってくれるという点ではよかったのですが、広くみんなに文化人類学とは何かを教えるには、これは不合格のやり方だったろうなと思いますけど。

米山 田中二郎さんが来られました。いま、掛谷さんから、弘前大学の外道の人類学の話聞いていたところです。土曜日を集中実習の日として運営されていたという話をうかがっていたのですが、地震の話は掛谷さんが来られる前の話ですか。その話を少ししていただけますか。

須藤 具体的にどういう形で学生さんを指導されたのか、先生と学生さんの関係とか、先生がどうバックアップされたのか、そのへんをちょっとうかがいたいです。

米山 そのいい例で、日本海中部地震というのがあって、「先生、地震だ」という報告書がで

ています。そのあたりのことを話の種にしていただけたらと思います。

田中（二） 弘前大学に赴任したとき人間行動学研究室は、社会学、社会心理学が一人ずつ、文化人類学が4人、宗教人類学が一人の計7人でした。関連の文化人類学を中心に生態人類学、宗教人類学、地域社会学、社会心理学という連中で、せっかく津軽にきたのだから津軽らしい研究をしようと、まずねぶた祭りを取り上げましょうということで始めました。

1年くらいは予備調査的に過ごしておりました。そして、地震がおこったのは5月28日かなんです。今年もいよいよねぶたも近いし、実習の準備を始めようかといってるときに地震が起きました。その日は、わあ、すごいなということで終わったのですが、翌日、みんなで集まったところが、青森でもずいぶん揺れて、秋田県では津波で150人が死んでたいへんな被害をこうむっており、ねぶた祭りは毎年やってるけど、地震は二百年に一度ぐらいしかこないから、せっかくの機会だから地震の調査をやらないかということで、地震の調査に切り替えたんです。

一日二日ぐらいで相談会をやりまして、教官を主体にしてアウトラインを考えました。その指導は文化人類学ではできなくて、われわれは揺れた、えらいこっちゃというぐらいしかできなくて、社会心理学とか社会学の分野では災害研究が進んでいるので、その人たちが核になりまして、地震の研究プランを練りました。少人数でやりますから、できるところだけやろうと。とにかく学生を総動員して現地へいかなければということで、それには金がかかるので金の算段もだいぶしたのですが、具体的な研究については、地震の3日目ぐらいから学生をどんどん出しました。だいたい車で2、3時間で行けますので、主として教官が運転をして4、5台に分乗して学生を乗れるだけ乗せて各地へつれて行って、3日とか1週間とか実際に現場を調査しました。そのときにただ見るだけでなく、ぼくはまったく素人ですから、多少心得のある二人にいろいろとマニュアルを作ってもらいました。

心理学の人は、あの揺れに対してどういうふうな反応をしたか、揺れがおさまって一段落したときにどういう反応をしたか、どういう行動をとったか、そして1日くらいしていちおうおさまったというときにどういう行動が始まるか、という人間の避難行動および災害に対する対応行動について。社会学の人は、むしろ地域社会に与えたインパクトを研究しようというもので、農村の被害状況、地盤の沈下、医療とかそういうものに対する組織としての対応、行政的な対応、村としての対応、村人たちの互助的な援助行動、親戚が中心になるのか近所同士でやるのか区長さんが中心になってやるのか、そんなことを研究していこうということで、ちょっとした報告書を出しました。「先生、地震だ」というのは小学生の作文集で、報告書は別に出しております。

3カ月くらいみんな必死になってやって、すごくしんどかったです。夏までかかってやったのですが、秋口になって調査が一段落したら、しんどかったけどおもしろかったな、やりがいがあったなと、学生さんたちもなんかやった気になったようですね。

米山 こういうふうに臨機応変というのも大事なわけですね。

福井 実習に参加している学生はどのくらいですか。

田中（二） 行動コースというのが、社会学も心理学も宗教学も含めて1学年が25人くらいです。それが3学年ありますから70人くらいです。4年生は卒論がありますし、就職があります

からしない。毎週50人くらいかな。

松田 それで実習になりますか。

田中(二) なりますよ。おもしろかったですよ。班分けをして、総括会議というのはときどきやりましたが、教官ごとにテーマを分けたり、地域ごとに分けたりして、班ごとの研究会をやるから、1つの班は10人前後です。

米山 それが毎週あるわけですね。

田中(二) 地震のときは、他の教官に話をして講義をさぼらせてもらったりして、かなり集中的にやりました。

米山 話題が期せずして②番目の「計画性とアドホック」にいきました。 たてまえの「文化人類学概論」の講義ということからいえば、江口さんが作ってくださったような、これは「一般教育の文化人類学」ということで考えてくださったのですが、「第1回ヒトと文化」から始まって、「人類学と21世紀の世界」で終わるような、こういうふうなことでやるのが一種の計画性と考えられますね。その対局にあるのが、いまの地震の調査の話で、ちょっと語弊があるかもしれないけど、アドホックといえるのかもしれません。

それから、このあいだも田中(二)さんと、わしらは完全にアドホックやからなといったのですが、私なんかきょうは何を講義しようかとその朝まで決まらないこともあります。教師というのはどうもそういうところがあるのかもしれません。これは非常に有名なエピソードなのでみなさまご存じかもしれませんが、数学の岡潔先生は奈良女子大から理学部へ講義にこられていたときに、石を拾って向こうに放って他の石の上にのったら講義をして、落ちたらし、と桑原武夫先生がおっしゃってたのを思い出します。これなどアドホックの極致みたいなものかもしれませんね。

3) 講義の組み立て方：教科書と授業

谷 江口さんのこういうのが一つの典型だろうと思いますが、項目があって、それに内容があって、「農民社会と文化 きだみのる にっぽん部落」それに関連して並列しながら、他の地域のこともしゃべる。こういうふうなものをどういうふうにとらえたらいいのか、うまく比喻が出てこないのですけれども、紙芝居ふうに変換してみせていくというやり方。さらに極端に言えば、民族学的知識を所与として与えるというやり方が一つあるわけです。

ただ、そういうところの文化というのは、少なくとも大学生にとっては、じつは文化といわれても、たとえば文化事象としてこんなものをあげなさいといわれたところで、ふっと思いつかないということが多いし、日本文化自身についてはわれわれも知らないことが多いと思うのですが。そういうところの知覚から始めるのか、ある種の既成のものというのか、人間はいかにして文化を獲得したか、という形で始めるのか、そこらはどうですか。つまり、文化について既成の知識を与えるのか、あるいは文化というのはどういうものなのかということを理解させることを基本的に考えるのか。後者の場合だったら、あまりおおくのデータをぼんぼんあげなくても構わないと思うのです。かなり効果的な部分だけセレクトして出して、自覚させていくというやり方でよい。やり方によって構成の仕方は変わってくるかもしれない。

米山 ちょっと混乱しているのですが、前者というのは、個別の知識、つまり民族名とか部族

名とか、生活様式とかいろいろあることを個別に教えるということで、後者というのは……

谷 基本的に文化事象というのはなんですか、ということです。それはある鍵をもったら、ほかのことも解けていけるというキーを教えるのかということです。一つのキーを教えたら全部わかるということではないけれども。極端にいったら、江口さんの場合、「狩猟採集民社会と文化」「牧畜民社会と文化」「農耕民社会と文化」というように生業文化という項目が6項目あるけれども、そういうところはもう少し小さくしてしまって、環境とのかかわりに関する部分として、いったいどういう見方ができるのかということを示すとか。

米山 それに関連していいますと、このあいだ中川敏さんという人が教科書を2冊書いているんですね。1冊は『猫好きのための文化人類学』、もう1冊は『犬好きのための文化人類学』。「犬好き」というのはエスノグラフィック的なもので、「猫好き」というのは分析的というのかな。これはいま谷さんがいったことを別々にまさに2冊作ったわけです。これはどうやって講義してるのかなあ。

田中(雅) 「犬」を1年で「猫」を2年でやってるようです。

市川 「猫」のほうはかなり難しい。基本的なことは書いてあるけど。

松田 途中で急に難しくなる。本人もそこが問題だといってたけど。

米山 講義の方法としても2種類ありうるということですね。

江口さんの講義案の対局に属するのが、私の一般教育の講義案で現在進行中のものです。前期はディスクリプションみたいな話をしておいて、後期は見ておわかりのように本の名前です。後期はまだしていませんからどうなるかわかりませんが、頭の中では構造を作っているのですが、パラダイムは単純で、人間対環境というのを文化環境と社会環境と自然環境の3つのレベルで、自然系、文化系、社会系と並べて、それぞれのところで講義をするというパラダイムなんです。それで繰り返しやっているわけなんですけど、枠組みをひとつ作っておいて、あとはアドホックにやる、とそういう形が経験的に出てきたように思うんです。

話題の③で「タネ本の問題」を挙げましたけれど、どういう立場でそれぞれの講義を組み立てていくかという問題がありますね。たとえば生態人類学を標榜するとすれば、生態人類学という立場を基にした形で文化人類学の単位を組み立てることができるわけですから、そういう組立の工夫みたいなことを議論していただけたらと思います。

その前の②の「経験主義」ということもあります。こういう言い方が正しいかどうかわかりませんが、少なくとも京都でのこれまでの学問の伝統で言うならば、フィールド・ワーク中心というのははずせない。探検主義と言われたり、山へ登りたいから学問しているのだろうとかいろいろ言われているわけだけれども、それが基礎になって、フィールド・ワークを前提としての学問というのがひとつの特徴だと思うんです。

そのあたりのことを、それぞれのフィールド経験との関連でお話いただければありがたいと思います。市川さんいかがですか。

市川 ぼくは文化人類学の講義をまだ一回もしたことがありません。したことがあるのは「人類学」の講義と、一度「民族学」の講義の中で「生態人類学」の部分を半期ぐらいしたことがあります。

そのときいちばん困ったのは、よかったことかもしれませんが、教科書がなかったことで

す。既存のシラバスみたいなものがあればそれに変更を加えたり修正を加えたりしてできたでしょうけど、それがなければ自分でやっていかなければいけなかったし、その元になる本も外国にもあまりなかった。だからいきおい、非常に身近な人たちの論文を自分なりに解釈して並べていく。それは自分がよく知っている例だから、わかりやすく教えられたと思っているんですけど、非常にかたよったものになったわけですね。

だからこういう概論みたいなものを作るときに、いったいどういう性格のものを作るのかということですね。概論というのは必ずしも全部盛り込まなければいけないということではないと思うんです。せっかく人類学の先生が何人もいるんだから、それぞれの概論というのを、「猫好き概論」と「犬好き概論」とふたつ作ってもいいんじゃないかと思うんですけどね。ただぼくの経験からいうと、技術だけ教えられても学生はあくびをしてしまうから、何かわかったという感じになってもらわないと。その何かわかったという感じになってもらうには、どうしたらいいかというのが問題ですね。

谷 それと、生態人類学な部分でもそうだろうし、社会組織とか親族組織などでも、ぱっぱとできあがったものを出すよりも前に、かなりシックなディスクリプションがあって、そこにいろんなエレメントがあって、それから引き出しながら演繹していくというほうがひょっとしたらいいのかもしれない。

市川 シックとディスクリプションのあいだで寝てしまうということがおうおうにしてありますが。

谷さんがおっしゃったように、どういうふうなものを書くかというふたつの分かれ目だと思いますね。文化とはなにかをしこしこと、「猫好きの人類学」はまさにそのものだと思うのですが、文化人類学とはどういうことをやる学問だということはかなり偏ってやってるように、ぼくは思うんですけど。それでも一年分の講義はできる。

米山 専門課程なら、かなり偏ってドグマでもいいではないかという考え方はできないことはないと思います。その人の講義なんだから。

谷 これは1年分でやらないといけないのですか。2年分で60回とか。

米山 それでもいいかもしれません。そうするとがっちりしたものができますね。

シック ディスクリプションということかというと、百科全書的に何でも出てくるというのがありますね。典型的なのはクローバーの『アンソロポロジー』です。ほんとにシックというか、その当時のアップトゥデートな情報を全部放り込んだ感じで、サブタイトルにリングイスティックス、アーケオロジー……とずらずらと並んでいる。

谷 シックというのはもうひとつ意味があって、たとえば西アフリカのある地域の、徹底的に細かい民族誌というものがある、あるいは日本でも細かいものがあり、いろいろな要素がある、そういう意味でのシックです。

米山 もちろんそれもあるわけで、きちんとしたモノグラフでいえば、たとえば具体的にあげるとすれば、ヌエルの3部作をがっちり読むというのもひとつの方法かもしれません。あるいはグリオール『青い狐』をテキストにして、それで何かをやるというのもひとつの方法かもしれませんね。場合によっては、研究者が自分でやってきたところを徹底的にやるというのもひとつの方法かもしれません。

市川 外道の人類学という部分をどういうふうに生かすか。

掛谷 学生さんが退屈で寝てしまうことをやってくれているということは、外道にとっては案外大事なことです。谷さんの言葉でいうとシックなところ、いっけん細かいけどそこにすべての要素が入り込んでいるところから、一点突破全面展開という形の人類学を教えていくのか、それとも広くやっていくのか。たぶん教官が何人か集まると、広くやってる人と一点突破の人というんですね。それを学生さんが選びながら聞いているというのがたぶん現実です。

片山 それでテキストブックとレクチャーとは違うんじゃないですか。テキストブックはできるだけシックなディスクリプションを入れて、レクチャーしてる途中であれを見ろこれを見ろというもので、レクチャーというものは基本的にはアドホックなものでないとおもしろくないのではないかと思います。学生さんがおもしろくないと思ったら、レクチャーとして成り立たないのではないですか。

ただここで問題になるのは、最初の米山先生のご説明に「これは若い講師や助教授などがはじめて教壇に立ったときに手引きになる虎の巻のようなもの」とありますが、そうなればこれはもうシックなディスクリプションにならざるを得ないのではないかなと思うんです。

米山 『目でみる人類学』というのを作ったのが1973年なんですが、じつはこれは、コピーがまだ未発達でしたから、講義のときにいちいち挿絵をかかなくてもいいように、ビジュアルにできるように作ったものです。これは講義の補助手段としてなかなか便利にできています。このごろはアウトオブデイトなところがいっぱいあって、とくにフィジカルなところは変えないといけないところがたくさんありますが、こういう補助手段のようなものを持っていないと、講義のやり方にもよりますが、不便なところがあるわけでしょう。こういうものは自分で勝手に見ておけということで、講義の中ではリファアーしないでやるのもひとつの方法かもしれませんが、自分で微に入り細に入る教科書を作ってしまうと、それを買わせて何ページを見ろというやり方もあります。とにかくいろいろなスタイルがあると思います。

4) 試行錯誤：日常性からの出発

米山 文化人類学を講義した経験から、菅原さんどうですか。

菅原 私は毎年迷って内容を変えています。まだ4年しかやっていないので記憶に新しいのですが、1年目は「文化と自然」をテーマに、レヴィ・ストロースの真似をして、文化と自然の接点はインセスト・タブーにあるとあって、その頃ちょうど『インセスト：バイオソーシャルビュー』という英語の本を読んだばかりだったので、インセスト・タブーの話を始めました。そうしたらえんえんと終わらなくて、結局夏休み前までインセストの話ばかりしてて、後期になって生業と文化のような話をして、それで一年が終わってしまったというように、非常に無計画でした。生業と文化といったときに三題話みたいにだれでも思いつくことなんでしょうけど、狩猟採集民、牧畜民、農耕民というふうにやっていて、狩猟採集民と牧畜民は耳学問でまわりの人からけっこう聞いているので話がもつのですが、農耕民というと掛谷さんの話ぐらいしか思いつかなくて、儀礼とか象徴とかのむづかしい話をしなければいけないのだなあ、困ったなあと思っているうちに一年たってほっとしたということです。

二年目は、後期に5ヶ月間海外出張するということもありまして、そのときの気分で、いま

は文化人類学の本はそこいらにたくさん出ているから、読めばわかることをしゃべらなくてもいいかと思ひまして、その頃出版された私の英語の論文を、専門領域の身体の問題というのをかなり自分では体系的に書いたつもりでしたので、これをやってやろうかと思ひました。二年目はほとんど無茶苦茶というか、ブッシュマンのところで見たり考えたりしたことをえんえんと前期のあいだやりました。

三年目、去年がいちばんまっとうじゃなかったかと思うのですが、「身体の人類学」と題して、身体性を人類学的に理解する三部面として、性と食べることと死と病いの3つの柱を設けて、それぞれにだいたい同じ時間を割いてやりました。性の問題ではインセストの話もちろんしましたが、現在の人類進化論で家族の起源がどう考えられているかという、ラグジョイの男が女を餌づけした説とか、血縁淘汰の話も折り込みました。そして、食の人類学というところでは、食物規制の話を詳しくしました。谷先生のレヴィ記解釈の批判とか、メアリー・ダグラスの話とか、市川さんの食物規制の話とか、口蔵さんのオランアスリの食物規制の話とか、マービン・ハリスの『文化唯物論』を種本にして、豚を食べることとかの話をしました。これは自分でもやってておもしろかったですね。これをやってて、あと思ったのは、たとえばこういう構造主義的な解釈がある、それを批判する形で実も蓋もないこういう唯物論的な解釈もあるという感じで、あえて論争的なスタイルというか、まったく反対の二つの陣営の話をしゃべると、学生はきき耳を立てるんだなあという印象を持ちました。去年の最後のほうは、内堀さんの『死の人類学』とか、長島さんの『死と病の民族誌』や、波平さんの本とかに頼ってやりました。

今年は、またがらりとスタイルを変えました。それはじつは自分にとっての便利さというのもあったのですが、龍谷大学で「コミュニケーション原論」という科目を引き受けたので、できればそれと似たことをやれば講義の準備が楽だなあと考えまして、コミュニケーション論にかなり集中しました。記号論の入門をして、柄にもなく構造論や象徴論もやってみようと思い、構造主義におけるコミュニケーション論とはどのようなものかという話と、この数週間間はスペルベルの象徴表現とは何かということを噛み砕いてしゃべることに費やしています。今年がいちばん抽象的なものになったと思うのですが、私の講義は試験が非常に甘いということをみんな知ってるらしくて、ふだんの講義に出てくる学生は非常に少ないんです。出てくる学生の表情を見ていると非常に熱心に聞いているようで、とくに、「校門圧死事件は管理教育の象徴である」というときの象徴という言葉と、天皇は日本国民統合の象徴である」というときの象徴がどう違うのかあんまり考えたことはないやろ」、原理原則を考えましようという感じでやると、けっこう興味をきいてるなあという印象を持つこともあります。

反省点としては、自分の知識量が圧倒的に少なく、いつも泥縄式であるということにじくじたるものがあります。

付け加えると、海外出張をするので補講をしたのですが、「コミュニケーションの文化人類学」のサブテーマとして、私たちの日常会話をどう理解するかということをやりました。最近手にいれた英語のテキストから引っ張ってきてやりましたら、そういうことも学生さんには興味のあることらしくて、つまり異文化の話ではなくて、アメリカ人の会話とか日本人の会話を黒板に書いて、こういうふうな規則があるんだという話をしたら、彼らにとっては新鮮な話だ

ったようです。異文化理解というオーソドックスな語り方と、自分たちの日常をどう振り返るかという話をドッキングさせて講義を組み立てるということがいちばん難しいことではないか。それが比較的うまくいくと学生の目も少し輝くのではないかという感じです。

米山 ついでに菅原さんが作ってくださった講義案もご披露いただけますか。

菅原 いま言いました2年分を1年分にドッキングさせたものです。

田中(二) 「犬の人類学」と「猫の人類学」にもかかわる話なんですけど、たとえばいまの教養部の文化人類学ですと、学生は一回だけ聴きにくるということですね。文化人類学のコースができて固有の学生ができると、4年間ずっと教えることになるわけですね。これはたいへんなことだと思います。弘前でも小さいコースだけど、2年から来て、確実に2年間はつき合うんです。そうすると前に何をしゃべったか忘れていて同じことをしゃべっている可能性もあるけど、できるだけ変えて交互にやるようにはするんだけど、それが3年間になるとほんとうにたいへんです。

それから教官陣はみんなやってることは違うけれど、概論みたいなことだと重なりあうところが多いから、どういうふうに分業するかということも、弘前でずいぶん苦労しました。教科書を考えると、1年ぽっきりのレベルで考えたらいいか、それとも2年なり3年なりのパースペクティブを1年ごとに分けて考えるかということですね。

市川 はなはだしい場合は、1回生から4回生まで、ときには大学院生まで同じ話をしているということになりかねない。

米山 たとえば地震があってそれを分業ということだったらできるけど、ルーチンだけで考えたら、かなり仕掛けをしておかないと、おっしゃるとおりたいへんだという感じはします。きょうここに出してるのは、タイトルは文化人類学概論ということで、1年30回分の講義案といっていますが、現実問題として4年、6年、9年ということで考えないと。

市川 専門課程というのは3回生ですね。それなら教養の文化人類学をとってるということを前提に想定するわけですね。

米山 そのシュミレーションのつもりで考えているんです。極端に言ったら、そんなことはできないということも結論としてはありうるわけです。ひとりひとり違っていらっしゃる方が、文化人類学の講義としてはより好ましいということになるかもしれません。

菅原さん、講義案についてお願いします。

菅原 いま言ったことと同じなのですが、ひとつは「序論」のところで、文化人類学というのは後ろ暗い血筋を持っているという話を、ルクレールの『人類学と植民地主義』なんかを種本としながする。正義派の学生は、うんそうだ、という感じで身を乗り出すのかもしれないけど、そのあとは肩すかしをくったみたいで、けっこうオーソドックスになっています。

それから「準備」のところで、社会人類学っぽい話をするときには、○△をどうしても教えないといけないので、それを教えがてら親族組織の初歩みたいなことをやりました。「身体性の基盤」と書いたところは、さっきお話したこととほとんど同じことです。それから「民族誌の概観」というのも、例の狩猟採集民、牧畜民、農耕民というのですが、実状は自分がしているところに力が入ってしまうので、狩猟採集民が2回だけというのはまったくの嘘でありまして、4、5回やってるんじゃないかな。それからさっきお話したように、農耕民のところ

で、知識がなくてネタがないということ。

記号論というのはほんとうに記号論の初歩みたいなものです。それからリーチの『文化とコミュニケーション』は文化人類学のテキストとして非常に評価が高いときいていたのですが、私は釈然としない部分があって、去年は後半これを読みながら、ぷりぷりしました。それから構造主義というのも難しいんです。一時はドミナントな理論だったと思うのですが、レヴィ・ストロースの『神話学』全4巻が日本語に翻訳されておらず、そういうことを全部闇の中で話をしないとイケないのはつらいので、そこらへんはむしろ『現代思想』などに載ってる構造主義の解説を読んでお茶を濁している、というのが実状です。

あとはさっきお話したこととほとんど変わらないと思いますが、こうやって思いつくまま書いていたら、3週あまってしまったのでいいかげんに書いてあります。

それからひとつ申しあげないといけないのは、この講義案を作るにあたってどういう配慮が働いているかということ、高畑さんが自然人類学の講義をしていて、それを受講しているという人がけっこう多いので、できるだけ自然人類学は重複するのでやらないという方針でやっています。もし、自然人類学をどなたかがやってくださってる状況じゃなかったら、最初のところに自然人類学関係のことを2、3週いれないといけないと思います。それをいれると最後の講義が埋まってちょうどよくなります。

市川 文化人類学を担当している先生にどういう人がいるかによって変わってくるということですね。

掛谷 どういうシステムの中で「文化人類学概論」をしゃべるかによってえらい違ってくると思いますね。

5)「反シラバス主義」

米山 それでだいたい③番目くらいのところにきていると思うのですが、どういうシステムの中で教えているかということで、同じ30週でも中身が違ってくるという話になりましたが、とりあえずはどういうのでやりましょうか。京都大学の総合人間学部が発足したと考えて、学部学生がほんとうの専攻学生になったと仮定して考えてみたほうが現実性がありますね。福井さんにはあとで話してもらうとして、松田さん、何かアイデアがあればお願いします。

松田 私も講義は「民族誌」とか「異文化理解」とかをさせられているのですが、講義ノートは1冊もありません。江口さんのもの一つの例だと思うのですが、こういうものを書くときには、どういう位置づけになるかですいぶん違うと思います。生業があって、生態があってというふうにずらっと並べるのだったら、もういろいろ本が出ているし、学説史の本も出ています。はじめに米山さんがおっしゃったような、京都で文化人類学の本を作るようなイメージというのは、私自身が関東の研究会とか学会とかで同じ世代の東大とか都立の人たちとやりとりをする、明確に文化が違うなあと思うことがある、ということですね。だからそのへんをふまえてやったほうがいいと思います。学説史を教えるものすごくうまいという人はこの中にはおられないようだし。

そういう点でみると、私が教養のときから習ってきた京大の文化人類学的な発想というのは、ひとつはサルー ヒト主義というか、サルとヒトを連続してみるという考え方です。これは他

ではなかなか通用しない考え方だとは思いますが。

もうひとつは、方法としての肉体主義といいますか、それをさっき米山先生は探検主義といわれましたが、それは今西さんの時代で滅びたとしても、方法としての肉体主義というのがあるとおもいます。

もうひとつは、反シラバス主義というか、私たちの中では、学説史をやって親族をやって生業をやって宗教をやってというような、そういう形で文化人類学に親しんだ人はほとんどいないと思うんですね。むしろ谷さんが言われたように、文化現象の幅をものすごく広くとって、食えるとか笑うというようなものから、生々しい開発問題とか飢餓とかというようなところまで広がってきているように思うんです。だからできれば幅広い文化現象をすくいあげてきた今までのトラディションというのは生かされるべきだと思います。

4つ目は、掛谷さんは外道主義といってましたが、ぼくは授業では生まもの主義というのですが、やっぱり生まものを扱うことだとおもいます。それはものすごくミクロなことになるかもしれませんが。いま私が学生といっしょにやっているのは外国人労働者の問題で、それをやりだしたら、日系ブラジル人の親族組織だとか彼らの宗教観に必ず触れざるをえない。だからそういう生まものをある程度重要視していく。そういう4つくらいが、京大を中心にして文化人類学に慣れ親しんできた私自身のイメージです。

谷 田中（雅）くんがイギリスでの講義をフォローしているから、ちょっと話していただいたらどうですか。

米山 どうぞご披露ください。

田中（雅） それは京大方式とはまったく違って、反肉体主義、反民族主義というか。18から21までの3年間で、1年生はエレメンタリーで、社会人類学一般、民族誌の話、2年になると親族を通年、政治が半年、経済が半年、3年目は、理論が通年、宗教が通年です。実際には一年に3科目か4科目とればいいんです。ただひとつのレクチャーについて、60分の授業なんですけど、それに対して120分の演習があります。60分の講義が20人くらいだとしますと、演習は二つに分けて10人ずつにして、講義で云った本を読ませて発表させる。ただその順番は必ずしも同じではないし、先生もティーチング・アシスタントが代わりにすることもあるという形です。私は修士で入ったんですけど、人類学を学んでなかった人は、学部で基本的なものを、2年生3年生の講義を受けさせられます。

テーマがものすごく細かく分かれているということと、あとアメリカと違うのは、教科書がないということです。アメリカの場合、文化人類学のテキストがたくさん出ていますが、イギリスの場合、あえてテキストというと、ルイスの『Anthropology in Perspective』くらいで、ほかはないですね。基本的には民族誌を読ませる。

それからテストの方法ですが、他の大学の先生がチェックするんです。たとえばLSEだったらサセックスの先生が入ってくる。サセックスのテストには別の人が入ってくる。へたな講義ができない形をとってるので、全体に水準化されていて、どこを出ていてもイギリスで人類学をとっていればこのくらいのことは知っているだろうということをねらっている。

それから、講義のときにリーディング・リストを配って、この週はこのテーマでこのテキストでやりますというのを出します。それを見て、この先生は80年の最初のところまでしか読ん

でないとかがみんなにわかるわけです。それはオープンですから他の先生にもわかる。他の大学の先生にもわかる。

それからもうひとつは、親族を3年やればつぎは政治経済というふうにまわすんです。教授の場合もそうです。教授はつねに理論ばかりしているわけではなく、2、3年ごとにまわします。中での均質性は高いと思います。

講義だけ聴いていてもわからないんです。演習でどんな民族誌を読まされるのかをちゃんとフォローしない限りはわからない。それからAVだけの講義というのもあります。それでやると、なんかわかる。

米山 フランスのことを知りませんか。だれかフランスがどうなっているのか知っていますか。イタリアはどうなっていますか。

谷 何十年も前で、ぼくは人類学をやったわけではないですけど、だいたいでいうと、イタリアの場合は、イギリスのように共通で他の大学が審査するという形でのスタンダーディゼーションはないですが、いちばん最初にこれこれこれこれのテキストをとにかく読め、と講義の始まるときにざあーっと書いてあることは確かです。それがみんな分厚い本ばかりです。10冊くらいできます。それが初級つまり1、2回生の手始めの仕事です。私のほうはその当時歴史でしたから、たとえばホイジンガーとかマンフォークを読んでましたが、古典です。

市川 日本でもそういう方式をとってるところがあるんですか。

谷 どうなんでしょう。

田中(二) 理学部に自然人類学講座ができて今西先生が併任でこられたとき、必読文献で10冊か15冊くらい並べられて、それに伊谷先生と池田先生が付け加えて、これだけはみんな読まなアカンというのがありましたね。その中に杉浦健一さんの『人類学』が入っていたのだけ覚えてます。

市川 今はまったくなにもないですね。スタンダーディゼーションとはもっとも遠いところですよ。

片山 もうめっちゃくちゃです。理学部の講義も「人類学」という講義で、「自然人類学」にはなっていないんです。だけど内容たるや、とにかく好きなことをやっていいみたいです。だから好きなことをやっていますけど。非常にかたよっています。イデオロギーの収れんみたいなものです。

米山 あなたはどんなことをやっているのですか。

片山 アジアの百万年とか、モンゴロイドの拡散とか、そういう話です。1年を3人で担当するので、10時間もないです。

米山 そういうのがいくつか重なって、一つの「人類学」の講義になるのですね。

片山 はい。石田さんは化石霊長類とかの話をして、西田さんは大型類人猿のポリテックス、ソシオバイオロジーの話をしています。とても一つの講義だとは思えない。聴いてる学生もメンバーがガラリと変わります。

掛谷 松田くんが言った「反シラバス主義」というものをみんな感覚的には共有してるんやないかな。そこでシラバスの的なものを作るというから、いったいなに考えてるわけ、という感じがなきにしもあらずや。

米山 いまイタリアが出て、イギリスが出て、フランスがちょっとわかりませんが、はじめから専門だけというかがチガチとやっているのかな。

アメリカはその対極で、自己評価主義というか採点主義で、しかも学生に採点させる。それをやりながらシステムとしては、100台200台300台400台で決まってるんですね。101というのは introduction of anthropology で1年坊主から聴いてもよい。102は introduction of cultural anthropology、103は introduction of physical anthropology、というふうなのが100台で、200台はちょっと難しくなって、theories of ethnology とかなんとかになって、300台ぐらいがもうちょっとアドバンスコースで peasant society とかがでてきて、400台はいちばんトップです。学部学生はだいたい300の初めくらいで、300台と400台でドクター・コースになる。今は違ってはいるかもしれませんが、ぼくの知っている30年前はそうでした。

自己評価が取り入れられてくるのはわりあい新しくて、先生の人気投票のようなことをして、学生の投票で給料が上がったり下がったりすることがあるようです。

同時に、最近のおかしな現象ですが、裁判で定年が憲法違反になり、なくなりました。ロバート・スミスあたりからあとは定年がない。このあいだベフさんにきいたらチョイスがあって、半分教えて半年休むというのでもいいということです。給料は半分になりますが。それからごそっと退職金をやるからやめろ、というのもあってバランスがいろいろあるそうです。かれは結局ぜんぶ教えることにしたそうです。

こういうシラバス主義というのは京大には向かない、という結論になってももちろんいいんですけど。一種の試行錯誤のやり方で。

6) どんな教科書がよいか

米山 このへんで次の問題に移ります。教科書には何がよいかというのは、ここでなにがいいかということを考えていただかなくてもいいのですが、いろんな仕組みの教科書がありうると思うので、すこし教科書談義をしていただいたらどうかなと思います。広い意味で、教材と考えていただいてもいいと思います。

谷 これこれはずひ方法としてはちょっとすぎたはなしやけど、通過しておくべきだとか、試行を練りあげる仕方としてはクラシックとしてよい本だとか、そういうものですね。

米山 それをいま、思いつくままに10冊でも20冊でも挙げていただいたらありがたいです。私の個人的な思い出の話をしたら、先ほどいいました350 くらいでエドワード・ウインターのコースで学説史を読むというのがあって、いちばん初めがサー・ヘンリー・メインの『古代法』、それからモルガン、デュルケームとか、一晩に1冊読むんです。夜に3時間くらいやって終わってからバーに行く。読んでいかないといけないのでたいへんでしたが、非常に勉強になったという印象があります。マクレナンとか、イギリスの進化主義が中心にデュルケームなんかはいってきてという感じでした。そういうものをいっぺん通しておくといいんですね。このごろは日本でもやろうと思えば、日本語でもかなりやれると思います。そういうクラシックを挙げていただけませんか。田中さん、どうですか。

田中(雅) イギリスではだれも推薦してませんけど、秘かに読んでたのは、ルイスの Anthropology of perspective でしょう。最近改訂版が出ました。

米山 こういうのがあるよ、というのを1冊ずつでもおっしゃってください。

レヴィ・ストロースの2冊本『野生の思考』と『今日のトーテミズム』などは必読文献でないかなと思いますけど。

谷 それはアンケートに付け加えてきいたほうがいいのではないですか。

米山 必読文献をランクをつけて挙げてもらいましょう。教科書とタネ本の両方をアンケートで推薦してもらいましょう。

それでは③のイズムの話は終わったことにして、④の教科書も推薦してもらいましょうか。お手元にあるリストの中でよいのがあれば。福井さん、新しいテキストを持ってこられたようですがいかがですか。

福井 これを持ってきたのは、今年出たということでどういう新しさがあるのかと思って持ってきましたが、そう新しくはなかったです。

それからタネ本と教科書がある程度区別しておかないと。

田中(二) 教科書というのはどういうものなんですか。

米山 ここに挙げたようなのが教科書です。これは例です。

福井 アンケートをとるときに、すでに社会人類学の一般は終えているもの、専門ということを前提にしないといけませんね。

菅原 ③の「根拠とするイズム」というのは、私はなににイイズムではこういうのがいいと思います、ということなんですか。

米山 いいえ、ちょっと議論をしていただいたらいいと思ったんですけど。機能主義とか、構造主義とか、歴史主義とか、たくさんあるでしょう。

それでは⑤番目にすすみます。「論理構成」をどうするかということを計画的にするとすれば、さっき菅原くんが言ったように、二説を両論併記する形で出したら弁証法的になって学生たちが喜ぶ、という話があれば。なんかサービスでしたか、『百年間のコントラバナーシー』という本がありますね。

田中(雅) 最近のコントラバナーシーではなくて、だいぶ古い話でしょう。1950年くらいまでの話です。

米山 学説史というのは、論争史でやったほうが、ほんとうはおもしろいかもしれないなという気がします。

7) 映像の体系的利用

福井 AVの問題で、視覚の問題でいいますと、教科書も大事ですが、ムービーはよくありますが、スライドも編集してもらえればありがたいと思います。

松田 スライド・ライブラリーがあればいいですね。

市川 スライドをビデオに直す機械があるから、ビデオにして解説を入れておいてくれればありがたいですね。

松田 著作権の問題があるからあんまり広げるとうるさいけど、知り合い同士でやる分には便利だね。

田中(雅) 構成も変わってくると思うんです。たとえば、ヌエルにはすごくいいフィルムが

あるでしょう。そうしたらそれを見れるほうがいいし、ダニとかブッシュマンとかそういうのをついでにしていくと、論争史だけに終わらないというか、民族誌も見れる。「ヌエル」は75分あり、それだけで1時間終わってしまうから、ヌエルをするなら最低2コマか3コマ必要です。だから、⑤と⑥とはフィルムの部分でだいぶ違ってくると思います。

米山 そうですね。これは買ってプールしておけば、あちこちで使うことはできるわけですね。

松田 そういう古典的な民族誌でなくても、市川さんがときどき見せてるようなスライドも、借りて映したいなあと思うときがあるんですけど。ああいうのがライブラリー化するとうれしいです。

米山 民博ではそういう機能はやってくれないんでしょうか。

福井 民博でいまやり始めてるのは永久保存です。スライドだと色あせるので、レーザーにしています。著作権の検討でずいぶんかかりましたが、最近やっと明確にすることができました。そうすれば将来遺産として残りますが、こういうテキストにどう使うかということは、いまところ具体的に考えていません。

米山 今度それを京大でやるか。

市川 ひとのスライドというのはわかっているようでわからない。

松田 解説者がいますね。

須藤 民博でレーザーを使ってやっておられるそうですが、いまセンターでも、渡部忠世先生の稲に関係するスライドをレーザー化しています。そこでいちばん問題なのは、スライド1枚1枚にコメントをつけていかないといけないということですね。データを加えていかないと資料として使えない。撮影年月日、場所、何を撮ったのか、を最低限いれないといけない。

福井 民博ではそれを条件にしています。

須藤 それが非常にたいへんです。ほくも今まで撮ってきたものを入れてもらおうと来年あたりから計画しているのですが、コメントをつけるのは全部自分でしなければいけないので、ストップしたり進んだり、そんな状況です。そういうものができあがってくると、著作権をクリアすれば、非常にいい教材として皆様と共有できるのではないかと思います。

市川 レーザーディスクには2万点くらい入るんでしょう。その中から適当に選んでビデオにおとすこともできるわけですね。

福井 たとえば限られた人たちが、ベスト50とかベスト30をコピーして、それは絶対この目的以外には使わないという約束をして、ビデオに編集してもらうことはできますね。

田中(二) 30年前のスライドは消えかかってるし、永久保存せんとあかんね。

米山 それをどこかでシステマティックにしないと。

福井 イギリス人は発表するとき、スライドなどは軽蔑したような感じで使わないのですが、アメリカ人はスライドを音響も含めていかに効果的に使うかと考えている、すごい違いがありますね。

須藤 ここでムービーとビデオとスライドを上手に使い分けると、いい教材ができるんじゃないですか。制作工程を追っていくときにはムービーがいいし、ある景観を具体的に説明していくときにはスライド、生産領域の説明にはスライドのほうがわかりやすいですね。

米山 それをアフリカ・センターで。

田中 (二) アフリカ・センターではいちおう各人の優秀作を自選で集めて。

松田 作ってあるんですか。

田中 (二) ただおいてあるだけ。

市川 しかし最近だんだん散逸してしまうので、また自分のところに引き取らせてもらっている。

米山 一元化して、京大AVセンターを作ったらいいですね。いいアイデアですね。

市川 いい機会ですからね。でも予算がかかるんじゃないかな。

田中 (二) 機械はともかく人件費が。だれか専属の人がいますわ。

谷 科研で申請したら。

米山 考えましょう。

すごいなあ。カリキュラム開発で、これだけ開発したらすごいですね。

谷 開発センターとかいてあるから、そこがそういうことをするのかと思っていた。

市川 スライドを提供して情報を提供して、そこでやってもらう。

須藤 それは基本的に撮った本人にやっていただかないと。でも2万枚というと遅々としてすまない。

福井 そこまでやるとこちらでも整理がたいへんだから、自分が発表とかでよく使うのが、せいぜい100枚あれば。

市川 100枚以下ということで。変なのがたくさんあってもしょうがないから。

須藤 100枚だと200人分くらい入るわけですね。

米山 スライドと、あと普通に使われる機器というのは、オーバーヘッドと16ミリビデオと8ミリビデオと音声、ぐらいですね。いまのところ京都大学でしたら教室で使うことができます。

いまは講義の話をしているので少しはずれますが、そのためにはちゃんとフィールド・ワークをして、ちゃんと記録をとって帰って来るということが大事ですね。材料がないと。材料は市販のものを使うということもあるでしょうけど、なるだけ自分たちで作ったほうが迫力があると思います。

谷 技術的なことをうかがいたいのですが、レーザーディスクの撮影機というものはあるのですか。

センターの人 まだありません。

田中 (二) なにかを8ミリビデオで撮ってきて、それをおとす。

市川 8ミリ撮る以上にはよくならないわけですね。

米山 技術面もまじめに考えたほうがいいですね。それをカリキュラムの中に組み込んでおいて、毎週一回映画会をやるというのでもいいんじゃないですか。ロンドの映画版のようなものができるんじゃないかな。

松田 だんだんチャランポラニズムになってきますね。

福井 阪大で講義していたとき、ある地域のモノグラフを読むと同時に、その地域に関連するビデオとか16ミリを見せて両方でやりました。

米山 それをもう少し具体的に話してください。

福井 「民族問題」というタイトルで、半年は集団や民族の特性についてしゃべって、あとは

いまさっきおっしゃっていた民族誌とか、地域、テーマ、都市に関心をもつのか、あるいは地域に関心と、3つくらいテーマを選んで、どれかのコースを選んででやりました。

たとえば自分のあこがれのところ、地中海とかアンデスとか、テーマだとたとえば女性とかジェンダーとかあって、いくつかこちらで本を選んだり、さらに自分で調べたかったら民博の図書館にきて好きな本を選んで、一人でもいいし何人かでもいいので、それを読んでレジメを作ってみんなの前で紹介する、そしてそれに関するビデオを民博で見せる、そういう講義でした。

米山 学生が阪大から民博へ行くんですね。

福井 半年くらい海外へ出かけるときがあるので、1ヶ月か2ヶ月のあいだ学生と日程を調整して、土日にまとめて民博でやりました。

8) 実習の組み方

米山 それでは⑥をおしまいにしまして、⑦⑧の「実習、演習との関係づけ」の問題に移ります。

弘前は地震の調査をしましたが、富山の文化人類学は、お祭りをえんえんとしているんです。毎年きちんとレポートを出しています。他のところはあまり情報がないのですが。

田中 (二) 金沢でもやっていますね。

片山 前は漁村の調査をやっていましたね。

市川 それこそそういうのは、米山先生のところが長い歴史を持っはるわけでしょ。

福井 さっき論争点をあげてということと言われましたが、それを解く、それにアプローチするにはどういう方法があるかというのを、私たちが知ってる既存のもので紹介していくということが必要です。そうすると具体的な行動に移れるのではないかと思います。1カ所がリアルに結び付いていくような道を、いくつか例を挙げて出していく

米山 もうちょっと具体的に言ってください。

福井 普通だと逆にいきますね。フィールドへ行って、情景があってアプローチがあって、順序だって記録されていく、そして最後はどういう展望があってという仮説なわけでしょう。

それを逆にして、初めに仮りに10の論争点を選んだとして、それに学生がどうやってアプローチするのかということが、具体的な手がかりになると思うんです。そうすればどういう対象を選んだらいいのか、たとえばインセストのことをやろうとした場合、人間のレベル、社会のレベルでどういうところを対象として考えられるのか、あるいはそこへアプローチしようとしたらどういう聞込みの仕方があるのか、ということをやると、単なる議論とか論争点が具体化されて、身近にかえてくるのではないかと思います。それがぜんぶ実習に関係にならずとも、自分の心の中で論争点が具体化するのではないか。

たとえば、最初から祭りというのがあるのではなくて、論争点を先にもってきて、その論争点を扱うためにひとつの対象として祭りがある、その論争点を追究していくためには、祭りの中のどういう点を扱ったらいいのかというふうにすると、論争点が具体的になるのではないですか。

米山 この場合の論争点というのは、インセストの問題や学説史上の問題もありますが、もう

ちょっと具体的な問題なんですね。いますぐ思い付くことでは、過疎問題があります。村がどんどんつぶれていくという問題がありますね。そういう問題を取り上げるということも考えられるわけですか。

福井 過疎はどうとらえるか、という問題がありますが。

米山 都市過疎というのがあります。都市のまん中が過疎になって、学校が統合されるということがあります。どういう現象があるかという調査はいまでもできないことはないわけです。理由として考えられるのは、こういうことだということを挙げていくこともできないことではない。

福井 たとえば、外国人労働者の問題とかが、身の回りで日常的に報道される問題になっているとき、いまの10のセオリーとはちょっと別ですが、この問題をどういうふうに扱うか、どういうフィールドでの手続きが必要なのか、といったようなことを考える。学生は研究者になる人ばかりではなく、将来マスコミで働く人にも、そういうことが例として出てくるかもしれない。

米山 そういう具体的な問題の方がわかりやすい。学説史的な大問題は一方であるけれども、もう一方で具体的、現実的な目の前の問題がある。両面あると思います。とっつきやすいことからいえば、後者のほうですね。たとえば、嘉田由紀子さんが取り組んでいるような「琵琶湖の水の問題」などは具体的だし、学生にもつかまえやすい問題だと思います。それと、抽象度の高い学説史上の理論を実習とどのように結び付けるかが大問題ですね。

須藤 ちょっとよろしいですか。たとえば、映像は現在の問題しか捉えることができません。過去にさかのぼっていかうとすれば復元しないといけない。やらせをしないと過去へさかのぼっていきません。さっき琵琶湖の問題が出ていましたが、琵琶湖の水がどれほど汚れているかということは映像で表現できるんです。それはなぜ起こったのかということで、問題を展開していくことはできるわけですね。ですから、福井先生が言われたことと映像を組み合わせると、現在起こっている問題が明らかになり、そこから問題が展開していくという作業が必ず出てくると思います。

私は、放送大学の学生とともに、榛名神社の調査をしているのですが、山岳仏教はだんだん人気がなくなってきている一方で、初詣や金比羅さんはものすごい人出です。日本人の宗教観が一方では衰微していき、一方では隆盛になっている、それはなぜかという問題はまさに現代社会の問題ですが、これは映像でかなり明確に表現できて、具体的なフィールドにつながっていく問題として出てくると思います。さきほど福井先生が言われたことは非常におもしろい問題であり、われわれも無意識のうちにそういうことをやっているんだと、そういう印象を持ちました。

米山 問題を列挙するということが一つの仕事としてあり、それに対してどういう実質的な実習のプログラムを組めるかということが大事かもしれませんね。

米山 松田くんは、実習をどういうやり方でやってますか。

松田 今年度のテーマは「日本文化」ということで、二つに分けて、一つは「都市の外国人労働者」、もう一つは、三重県尾鷲の「山村の日本のトラディション」、両方を通して日本文化を立体的に考えようということです。

いちばん初めに基礎文献を10冊くらいあげて、それを4、5、6月と集中的に発表させてい

くと、なんとなくみんなわかったような気になってくる。だけど、開国論だとか鎖国論だとかいうような立場をそれぞれ持たせておいて、それを壊してやろうというのが目的だったので、そのあとオーバーステイしているフィリピンの人とか、日系ブラジル人の人に来てもらって話をしてもらったり、各自が班を編成して外国人労働者と1対1でつき合う、というのを夏休みの課題にしているんですが、そうすると鎖国論とか開国論とかの知ったかぶりの議論はほとんど意味がないというリアリティーにぶつかる。それから、相手は非合法的存在ですから、調査しに行っても断られるという当りまえのこともある。こちらから調査するということの権力性というか、学生は調査するといったら誰でも協力してくれると思っているところがあるのですが、それとは逆に調査するといっただけでいやがられる社会というものの経験もしてもらってます。いまはそれぞれの対象のところを手伝ってあげたり、会うのも人目をはばかったりと、そういうふうに関わる相手のライフと自分のライフを相互に直面しあうという課題を与えたんですが、どうなるかわかりません。

実習というときに、一般的によくいわれる議論がありますね。日本文化は閉鎖的であるとか、そういう命題をはじめにやるんです。外国人労働者はある程度の条件で引き受けなければいけない、というようなわりに説得的に語られている言説をやっておいて、それをそれぞれ宿題として与えておいて、調査のあとでもういっぺんくずしてわからなくさせる、というのがぼくの意図だったのですが、どうなるかわかりません。

米山 今の段階でかなりやったという意識はありますか。

松田 勉強しているときは、ただ新聞の切抜きをするのがしんどいというようなことはありましたが、こんど人々と付き合い始めると、楽しんでやる学生とこんなだとは思いませんでしたという学生がいます。ただ、あんまり教員は出ていけないほうがいいなと思います。初めはいろんなアポイントのとり方とか、関係団体へのあいさつとかを言ってたんですけど、それをする断られる経験を知らなくなるから、まるごと任せることにしました。

米山 かなり実践的でおもしろいですね。

市川 何人くらい参加してるの。

松田 村のほうはあんまり人気がなく10人くらい。外国人労働者のほうは7、8人ずつの班が6つくらい。

米山 我がほうの実習はまったくやらんぼらんで、去年からは鴨川を調査しています。去年は、雲が畑の調査をしました。それから上賀茂神社を調査しました。今年は今出川から七条まで、テーマはエンターテインメント、遊びで、現在進行中です。後期はその報告という、だいたいそういうスタイルです。

松田 このカリキュラムの中に実習を入れるんですか。

米山 いえ、この中には入れてません。これと平行して存在してるということです。

市川 講義内容に関連して実習すると考えなくてもいい。

米山 できれば多少関係を考えてほうがいいわけですね。

松田 実習のカリキュラムもいっしょに考えるということなんですか。

米山 それは別のものとして、きょうのメインテーマは講義です。実習の経験はどなたか他にお話いただけませんか。

福井 掛谷さんがまとめたブナ林はどういうふうにされたんですか。

掛谷 田中さんが弘前に行かれて、地方大学だから地域の問題をやろうということで、津軽研究と称して、ねぶたを調査して、地震がおこって、それが終わって次にどうしようかというときに、ぼくが移っていきました。1年目はねぶたをやって、報告書が出て、つぎは雪の問題をしないとイケない、雪とはなにか、雪と生活ということでやりだしたんですが、これは非常に重い問題でした。それもいちおう動きだしたんですけど、そのときちょうど白神の林道の開発問題が起こって、その問題には筑波にいるときから関心を持っていたし、科研もそれで通ったので、学生も巻き込んで、筑波の環境科学の学生も大学院の実習に入る人は入って、われわれは地域の文化がどう変遷していくかということで、毎年地域を2つずつくらい決めて、学生をつれて入ってそれを3年間積み上げてやったということですね。

そのつぎは、弘前研究をしました。

雪の調査のときは、かなり綿密なプログラムを作って、青年会議所にも協力していただいて、雪日誌を毎日つけてもらうということにしたら、雪が降らない。どれだけ雪かきしたかとかいう雪日誌をつけてもらおうと思ったのに、ぜんぜん降らない。ぼくらのところは、文化人類学プロパーに収れんしているというよりも、他の領域とのエンカウンターという形で展開するというか、人間行動だけでなく他の人も巻き込むという形で、統括してきました。そうするとマネジメントがたいへんで、そんなんは、そろそろやめようかということになりました。

米山 そういう意味では、宗教社会学の人が入っているのもいいかもしれませんね。

田中（二） それ以外に、生態学者を入れたり、地震のときは地震学者を入れた。

松田 実習は、interdisciplinary のほうがおもしろいですね。お祭りの研究でも、宗教儀礼の研究でやると先が見えるけど。

田中（二） 京都でやるとすると、そう遠くではやれませんから、この周辺ということになりますでしょ。比叡山から始まって。

米山 やる気になれば、百年分くらいありますよ。

掛谷 実習を組み立てていてよくわかるんですけど、ぼくらが見通しのあることをやらすか、見通しがぜんぜんないからやらすか、どちらかの戦略をはっきり立てないと、という感じがしますね。

松田 村に行ったりするのはだいたい見通しがあるんですよ。でも開発とか外国人とかが入ってくると、どうなるかぜんぜんわからないということになる。

田中（二） 近いうちに、スギ林の文化人類学的研究というのをやってほしいですなあ。それでなんとかスギを減らしてほしい。

市川 ほったらかしやね。

掛谷 福井さんがいうリアリティーの世界と、人類学でいろいろ問題にしていることが乖離してきているところがある。それは、菅原さんが最後に願いを込めて書いている「再生への道」へとつながるんでしょうけど、これからの人類学は、リアリティーと人類学の世界とがどうしたらどうなっていくのか、ということを考えなければいけない。実習というのは出ていくのだから、いろんな形でリアリティーがあります。

米山 その意味では、フィールド・ワークだってそうですね。たとえば、今年の南アフリカの

大干ばつをどうしてくれますかという話がありますね。

田中（二） もう行くのいやになる。ものすごい現実です。

米山 それは極端に言えば、さっきの雪の降らない雪日誌と連動しているわけですから、そういう問題を考えていくのも大事ですね。

松田 この前、知合いのアフリカ人が来て、from researcher to volunteer というタイトルで、もうアンソロポロジストではおられなくなるからという話をしていました。当然ぼくらのことを批判していると思うんですけど。

田中（二） その人は何をしてはるの。

松田 先生をしています。ケニア人です。

米山 アフリカなどでは、自然環境の問題だけでなく、政治の問題もからむでしょう。南米でもそうですね。そういうのと文化人類学はどこで接点を見いだすのか、あるいは見いださないのか、という問題があると思います。それはたいへんつらい問題で、ここで解決をするというような問題でもありませんが、考えの中にいれておかないと具合が悪いですね。

9) 演習：フレキシブルな可能性

米山 実習の話はこれくらいにして、ゼミとの関連に移りたいと思います。ゼミは先生がお好きなようになさればということだと思のですが、これをどういうふうに関連づけたらよいか。

私のゼミは、いまのところアフリカ地域の研究です。はじめから学生に報告させるスタイルです。

福井 どういうものを読ませているのですか。

米山 ぼくの書いたNHK出版の『アフリカ学への招待』をベースにして、たとえば芸術のところでは、ロック・ペインティングとか仮面とかがあって、そのときにパリンダーの「ミソロジー」とか吉田くんの「仮面」を紹介してもらうというように、ブック・レビューのような形でやっています。来年からは大学院も始まりますし、スタイルを変えないといけませんね。

掛谷 いまのお話をきくと、文化人類学概論というのは、学部の構造というか全体の構造に演習があり専門の講義があるその中で、文化人類学概論はどういう役目があるのか、という位相がないとむづかしいですね。

福井 人類学者の書いたモノグラフだけではなくて、いろんな社会が描き出されたものも取り込んでいったほうがいいと思います。もちろん人類学者のモノグラフもリストアップして、それプラス何かを。

片山 京大の人類学はあまり先鋭化しないで、いろんなものを取り込みつつやるという方向性が必要なんじゃないでしょうか。ほっといたらどんどん過激になってなんだかわからなくなる。

掛谷 あんまり教えないということですね。

片山 福井さんがいまおっしゃったことは非常に重要なことだと思います。とくにゼミはそういうものを取り込むのにいい場なのではないでしょうか。

福井 さっき掛谷さんがいったけど、ぼくなんか自由にはなろうと思ってるけど、だんだん凝り固まってきてるでしょう。だけど、学生はもっとフレキシブルな世界をもってると思うんです。だからそれぞれの芽を出すような装置を考えないと。基礎的な知識というのは、なにか問

題に遭遇すればリファァし、そのときにはじめて基礎的なものが身に付いていくような気がします。

10) 学説史は、講義に必要な：現在の視点から

米山 それでは最後の「⑨学説史をどう教えるか」に移ります。学説史はすでにたくさんあります。これまでの本はほとんど学説史みたいなものです。この『エッセンス』とか、綾部さんの『群像』、『15の理論』とか、要するに学説史ということではいいですよ、汗牛充棟といえますか、いっぱいあります。横文字でもかなりたくさんあります。そんなに気にしなくてもいいかもしれませんが。

片山 学説史というのは教えるものではなくて、勉強するものではないですか。これを教えるとしたら非常に教条的になってしまいます。文化人類学ではわかりませんが、少なくとも自然人類学では意味ないんです。というのは、パラダイムがころころ変わって、問題点も変わっています。昔のことを追っかけていってもあまり意味ないんです。新しいところをするときに、昔はなんでこんなバカなことを言ってるんだろう、とリファァしたらいいことなんです。

市川 それをやらないというのが京大の特色じゃないですか。必要に応じてはやるけど、最初からそれをやらない。

福井 学説史というのは味気ないですね。もしやるとすれば、Annual Review of Anthropologyなどで、いまの論点から学説史を勉強すればいいと思います。

掛谷 味気ないし、たいへんですけど、外の人でやってくれる人があればありがたいですね。

田中(二) 人数がたくさんいればできますけどね。弘前でも、みんなで分担したら、ぼくが学説史をやることになって、味気ないけど。

福井 雄山閣からでた『村落史講座』の中で、文化人類学から村落史へのアプローチというannual review的なものを、どういうアプローチの仕方ができるだろうかと、自分なりに模索して書きました。

米山 だから、必要に迫られてやらざるをえなくなったら、やれるという、そういうものですね。ぼくはいま、毎年ブリタニカの事典のアンソロポジーの項目をやっているんです。原本を訳して、ちょっと付け加えるという仕事ですが、アップトゥーデイトがいちおう出てくるから、リファァするのに便利ですよ。

松田 ぼくはそれで育ってきたし、それでいいと思うんですが、ただ、ベーシックなことを知らないという致命的な欠陥がいくつかの場面では出てくると、こんなことも知らないの、と言われることもあります。社会学だったら専門が学説史という人がたくさんいるわけですが、人類学の場合は、都立の人などのように基本的なのは原典にあたるという教育を受けた人と、そんなおもしろくないことはいいという人とは、方向がぜんぜん違うと思います。だから、その方向をちゃんと定義しておかないと。そういう特色というか、ある面では短所ともいえるのですが。

市川 どこに置くかですね。脳天気にはやってるのか、極端に言えば、ひねこびた人類学をやるのか。

松田 頭脳か肉体か。アンソロポロジカルな知的トラディションでものを考えようとする傾向か、外道じゃないけど、実際にあることをやって、そこから出発するか。

掛谷 ぼくらが育ってきたときは、まだ人類学が制度化されていない時代で、今度は京大に文化人類学の講座ができる、制度化の極致で、そういうときに、ぼくらが育ってきたときの話をそのままいっていいのか、ということはあるでしょうね。

福井 京大の文化人類学の人、無知蒙昧といわれたりして。

松田 ぼくは本を読んだことがないと言われてますからね。

米山 そういうのを野生の思考というんです。

福井 学説史をやると、だれが何を言ってるということが気になって気になって、片山さんがいうようにそれに時間をとられてしまう、ということもありますね。

須藤 講義では、野生の部分や外道の部分を出して行って、こういう番組で、学説史とかそういう部分をカバーしてしまうという手はあると思うんです。

米山 こういう番組というのは、「文化人類学概論」ですね。

須藤 それを映像なり、ビデオで処理してしまう。ただそれをやりますと、学生が半分以上寝てしまうと思いますが。そういう処理の仕方をしておいて、実際の講義は自由闊達におこなうという方法はあると思います。

菅原 「マンガで読むマルクス主義」とかいうのがありますが、だれか「マンガで読む文化人類学」というのをかいてくれたらありがたいですね。

福井 うちの子供がファミコンに凝ってるんですけど、ああいうファミコンに文化人類学というのがあったらけっこうおもしろいんじゃないかな。

菅原 ゴールは再生への道とか。

米山 そろそろ時間になりました。それではみなさま、きょうはわざわざお越しいただいてありがとうございました。

付録資料(2) 参考文献

Barnouw, Victor	Anthropology	Dorsey Press	1979
Beals and Hoijer	An Introduction to Anthropology	Macmillian	1953
Bock, Phillip k.	Modern Cultural Anteropology	Alfred A Knopf	1969
Chapple and Coon	Principles of Anthropology	Henry Holt and Company	1942
Dundes, Alan	Every Man His Way	Prentice-hall, Inc	1968
Farb, Petter	Humankind	Houghton Mifflin	1978
Firth, Raymond	Elements of Social Organization	Tavistock	1951
Gadamer und Vogler	Neue Anthropologie Band 1—2	Georg Thieme Verlag	1972
Hoebel, E. Adamson	Man in the Primitive World	McGrow-Hill	1958
Hoebel and Frost	Cultural and Social Anthropology	McGrow-Hill	1976
Honigmann(ed.)	Hand Book of Social and Cultural Anthropology	Rand McNally and Company	1973
Hughes(ed.)	Make Men of Them	Rand McNally and Company	1972
Keesing, Felix M.	Cultural Anthropology	Rinehart and Company	1958
Kroeber	Anthropology	Harcort, Brace and Company	1923
Moore, Alexader	Cultural Anthropology	Harper and Row	1978
Pelto and Pelto	The Human Adventure	Macmillan	1976
Roe(publiser)Starr(ed.), et al.	Authropology Today	CRM Books	1971
Rossi, Buettner-Jausch and Coppenhaver(ed.)	Anthropology Full Circle	Praeger	1977
Spradley and McCurdy	The Cultural Experience	Science Reserch Associates	1972
Stewart, Elbert W.	Evolving Life Styles	McGrow-Hill	1973
綾部・大林・米山 編集	文化人類学入門リーディングス	アカデミア出版	1982
松園万亀雄 編集	社会人類学リーディングス	アカデミア出版	1982
祖父江孝男 訳編	文化人類学リーディングス	誠信書房	1968
リーチ著 長島信弘訳	社会人類学案内	岩波書店	1985
ボック著 江淵一公訳	現代文化人類学入門(1)~(4)	講談社学術文庫	1977
クラックホーン著 光延明洋訳	人間のための鏡	サイマル出版	1971
ポコック著 末成道男訳	社会人類学入門	弘文堂	1970
綾部恒雄 編	文化人類学15の理論	中公新書	1984
綾部恒雄 編著	新編 人間の一生	アカデミア出版	1985
石川栄吉 編	現代文化人類学	弘文堂入門双書	1978
石田英一郎ほか著	人類学	東京大学出版会	1961
梅棹忠夫 編	人類学のすすめ	筑摩書房	1974

片倉・佐藤・青柳 著	文化人類学	八千代出版	1977
蒲生正男 編	現代文化人類学のエッセンス	ぺりかん社	1987
蒲生正男・祖父江孝男 編	文化人類学	有斐閣双書	1969
蒲生・山田・村武 編	文化人類学を学ぶ	有斐閣選書	1979
京都大学人類学研究会 編	目でみる人類学	ナカニシヤ出版	1973
合田 涛 編	現代社会人類学	弘文堂入門双書	1989
杉浦健一 著	人類学	同文館	1954
杉本尚次・三上勝也 共著	文化人類学への道	ミネルヴァ書房	1973
祖父江孝男 編著	テレビ大学講座 文化人類学	旺文社	1981
祖父江孝男 著	文化人類学入門 増補改訂版	中公新書	1990
高橋統一・中村孚美ほか著	文化人類学の視角	犀書房	1970
高橋統一・中村たかを他著	人類学	犀書房	1974
高山龍三 著	ヒト・文化・文明	八千代出版	1979
谷泰・米山俊直 編	文化人類学を学ぶ人のために	世界思想社	1991
寺田和夫・小池祐二ほか著	人類学	東海大学出版会	1985
富田正史 著	文化人類学	福村出版	1987
姫岡 勤 著	文化人類学	ミネルヴァ書房	1967
堀 喜望 著	文化人類学	法律文化社	1954
馬淵東一 著	人類の生活	毎日新聞社	1952
村武精一・佐々木宏幹 編	文化人類学	有斐閣Sシリーズ	1991
山口昌男 著	文化人類学への招待	岩波新書	1982
吉田禎吾 編	文化人類学読本	東洋経済新報	1975
吉田禎吾・蒲生正男 編	社会人類学	有斐閣双書	1974
吉田禎吾・寺田和夫 著	人類学入門	東京大学出版会	1974
横田健一・樋口隆康 著	人類学要論	ミネルヴァ書房	1964
米山俊直 著	文化人類学の考え方	講談社現代新書	1968